

清國奉天日本總領事館
（指印）

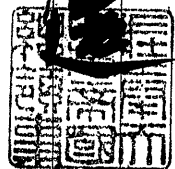
明治四十三年九月二日接受 主務政務局

第八七號

明治四十三年八月廿六日

在奉天

總領事 山田長造



外務大臣伯爵小村壽太郎殿

撫順炭鑛警務案權問題之圖及
清國官憲ト往復文書送付件

撫順炭鑛ニ於テ警務案權問題ニ関ス
ル奉天支務使ト往復公文書別紙甲乙丙
丁各号ノ通り及テ送付件同右査査同相

在清國奉天日本總領事館

成慶此段申進片敬具

通而右公文書ハ在清帝國公使及関
東都督ト之送付設置也

甲



界字四百十一號

欽命高麗戴實戴範總督奉天左路使司李法使韓
照會事關於煤礦問題現經彼此會商其
鑒察一事前經本司提議尚未商定自應維
持現象俟決議後方能作定乃千金寨舊市
街現有日人數立此查詰所經撫順縣派巡官往
詢據該警部奉岸太郎聲稱巡查詰所地
址係炭坑用地與新市街性質相同貴局不
必問教立原因等語殊屬不合相應照會
貴總領事速飭撤去望速見復施行須至照
會者

右照會

在清國奉天日本總領事館

大日本駐奉總領事官小池

宣統二年七月十四日

乙



全第 二四九 号

以書翰致致上候陳者貴歷七月十四日付界字
四百十一號御照會中御記載ノ發務支署ハ機
順岩仇問題ノ商議開始ヨク又レキ以前ニ於テ邦
人保護取締ノ必要上設置レタルモノ有之候間可
然御承知相成度此段及回答候致具
明治四年一月十九日

在書夫

大日本帝國總領事小地張造

大清國署理奉天支使韓國鈞啟

在清國奉天日本總領事館

丙



界字四百十九號

欽命品頂戴賞戴花翎武署奉天交涉使司交涉使 為
照復事關於撫順煤礦界內日人擅自設立巡查詰所一
案准

貴館西九號照復函悉查撫順礦界現正在商議之中
警備事宜曾已提議自應俟問題解決彼此允讓
方為正當辦法今奉照謂該巡查詰所係未開議
以前所設置者尤非確實本司碍難承認相應照
復請飭停止為要須至照復者

右 照會

大日本駐奉天總領事官小池

宣統二年七月二十一日

在清國奉天日本總領事館

丁



公文第二五九号

以書翰請照覆及陳者撫順尖鑛区域内之設置也我
巡查詰所一件之関之清歴七月二十日付界字四一九号
公文ヲ以テ此照會ノ趣陳閣憲致明治四十二年九月
四日北鑛之於テ訂定セラルル日清協約ニ依ルハ撫順
尖鑛ノ関シ協定ヲ要スル事項ハ課税ノ関スルコトノ外
尖鑛ノ区域並ニ一切ノ細則ニ有テ警察ノ事ノ如キ
ハ大問題ニシテ細則ノ中ニ入ルヘキモノニ毎之ヲ從テ撫
順境界ハ現ニ商議ノ中ニ在ル貴司ノ云ルハ通りナ
ルモ警察權ノ問題ハ其内ニ包括セラルルモノニ毎
之又之ニ關シ貴司ノ提議ニ對シテハ本館領事ニ
於テ曾テ承諾シタルコトニ毎之次第ニ其間右様ニ承
知置相成度此段回答得貴司致目大

在清國奉天日本總領事館

明治四十三年八月廿五日

在奉天

大日本帝國總領事——七地張送

大清王署理奉天交涉使韓國勅使

明治三十三年 九月 八 日 起草 鄭

主任

少地事案係修、未撤可矣ハモ、時別、氏甲多字
韓、事、文、係、使、少、地、係、修、可、思、文、海

以、書、部、修、上、不、降、接、吸、炭、礦、下、起、一、三、日、下、双、方

協、議、中、^{ニ、係、リ}、修、案、ノ、件、一、三、日、ハ、前、如、日、ノ、接、議、ニ、シ、テ、未

夕、決、定、ニ、至、ル、ハ、以、テ、現、狀、維、持、ト、シ、要、協、議、決、定、上、確

定、ス、キ、モ、一、方、ノ、一、三、日、金、素、田、市、街、ノ、修、上、地、査、詰、所

外務省

ヲ、設、置、ス、ル、ハ、以、テ、接、吸、縣、ノ、修、上、地、査、詰、所、下、付、ス、ル、ハ、以、テ

日、本、修、部、山、岸、岸、安、田、江、^{ニ、係、リ}、地、査、詰、所、ノ、土、地、ノ、炭、坑

用、地、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所

設、置、ス、ル、事、因、ノ、下、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所

不、當、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所

修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所、ノ、修、上、地、査、詰、所

宣統二年七月十四日

申

門而号字海

以書官所修上り下り、核順炭礦境域内ニ平商人ノ權、

此處迄所設之、件ニ至シ半條、其ノ内九号ノ以、四回、其ノ趣、

所取、然ル核順炭礦境域内ニ、目下、協議中ニシテ、終、素、

ノ件、ハ、常ニ、協議、及ヒ、其ノ、以、可、般、解決、上、双方、ノ、協議、

承諾、ヲ、決、ス、ル、正、者、ノ、指、定、ト、為、ス、此、點、迄、所、ハ、開、議、以、前、

所、至、ス、ル、モ、ト、申、申、然、モ、此、金、ノ、確、定、ニ、至、ル、事、及、本、日、所、至、

右、取、認、所、定、金、額、ヲ、依、テ、取、ル、差、止、メ、方、ハ、金、令、申、申、ノ、核、順、炭、

外務省

中、外、官、民、間、ノ、長、久、和、解、

宣統二年七月、本、下、

昭和四年八月二十六日 記録一五二



手

昭和四年八月二十六日 記録一五二

関心會議報告書

（第四回第十一面より）
由第八回より

1-1811

0122

お冊寫り等御送附

申上

敬具

九月十二日

東京滿洲支社

清野理事

外務省

倉知政務局長殿

河津山

河津山

中

撫烟西炭坑ニ関スル第四回會議報告書

(七月七日午後三時)

我日ヨリ昨日ノ會議ニ於テ露國側ノ証據ハ我ニ知ラサル所
ナレハ之ヲ承認スル能ハヌト又西炭主張セラルル所
本日ハ先ッ貴國力之ヲ知ラヌト云フヲ得サル理由ヲ冷革ニヨリ
テ説明スヘシ

増其得軍力増大ヲ許可シタル當時ノ事情ヲ調査
スルニ據リ得軍ハ一面華興利公司ノ株主トナリ又自ラ
五ノ株ヲ所有シ他方撫順煤礦公司ノ株主トナリ又自ラ
五ノ株ヲ支出シタリ而シテ撫順煤礦公司設立
際制定シタル得軍モ之ヲ華興利公司ノ所ノ契約書
ニ據リハ楊柏堡河津山以テ界トシ河津山至氣連河東ハ各

四十三年十二月十一日

願之樂之降るを旨う記載し且又確つ脈の有を望み
 一ヲ認メタル旨う記載せり斯うて此ノ撫順煤礦
 ノ鑛區及一切ノ財産ヲ露國極東森林會社
 此レモノミテ其際公司ノ取締役タリシ
 紀鳳台ハ此賣買ノ事ヲ資本主一同ニ謀リ其議ヲ
 得たり故ニ資本主一人タリシ増退將軍モ亦其議
 議ヲ喜ハタルモノミシ人ノ之ヲ知ラスト云フヲ得ス而シテ其際
 取捨ハレタル賣買契約書ヲ據ルハ鑛區ノ開闢ヲ撫順
 界ノ千山台地方ニ於テ南方ニ此方ニ流ルハ河ヲ異トシ
 其東方ニ於テ同界ノ石炭令郡區全部ニ与リ無期限
 手石炭ヲ採掘ス權ヲ官吏會壽公ニ移之樂ニ委任シ

右ノ開闢ニ光緒二十七年八月八日成西京省住民ニ告
 シ為セリ云々トアリ乃チ賣主一冊負タリシ増退將軍
 ハ無論之ヲ知リタシ然ナリ又左ノ告示文ハ貴官衙ニ存在
 ス然ナリ然ルハ則チ増退將軍カモ石炭令布區
 全部ニ与リ鑛區トスコトヲ承諾セシモノト断スヲ得ヘ
 今且ニ此ヲ之ヲ打消サレトセラルハ其意ノ有ル所ヲ
 了解スルニ甚シムナリ

彼曰ク増退將軍ハ當時撫順煤礦ハ公司カ外人ニ
 授ク賣買リタリトテ之ヲ訓シタルホトナシハ將軍自ラ資本主
 トナレカハキコトナシ

我曰ク否々將軍ハ王命所炭坑ノ炭係ニ居リタルモノハ一

疑々然ス將軍ハ表面自己ノ名ヲ現ハスコトヲ辯ケテ公
府當主ナル義ヲ以テ加入シ居リタルナリ(此時契約書全
彼日(1)呂宋石炭令布區全部ニ及ス無期限ニ石炭ヲ
採掘スルコト告示セリト云ハレタルモ此ノ如キ文ハ子ノ告
示ハ當主ノナシ

(2)公府當主ハ當主ノ名ニシテ増徴將軍ニアラス之ヲ將軍
ナリト斷言證據アリヤ

(3)森林會社ハ石炭坑ヲ賣入度ニコトヲ呂宋至ニ相談シ
呂宋至ニ之ノ承諾ヲ得タルト云フモ公府當主ハ將軍
ニアサセハ將軍之ヲ知リト云フ理由ト爲コト得ス

(4)金額二人トモ此賣買ノ事ヲ知ラサジト思フ然レシ

ヲ知リトセハ代金ヲ要欲シタルハキヲ以テ當時將軍

ニ訴フ出ツルナキ然レニ二人ハ當時將軍ニ訴フ

由タルヲ見シハ二人モ賣買ノ事ヲ知ラサリシナキ

我日(1)我々ノ告示セリト云ヒシハ此賣買ノ行ハ權利ノ移
轉シタル事實ヲ告示セリト云フコト出ス石炭令布區全
部ニ及ス云々ト契約全文ヲ掲ケテ告示セリト云フコ
ト又ス當時石炭採掘ニ付種々ノ告示ヲ出シタル筈ナ
シハ純ク誤謬セリト云フ

(2)公府當主ハ將軍ノ事ト云フ證據アリヤト云ハレ
モ此種ノ事ハ文ノ證據アリヤナキナシ是者ハ將軍
カ被買者タル會社加入スルニ當リ公然其名ヲ著

此事能久極之及名ヲ用セんと貴方官記録
 二付テ調査スモ公府堂即々將軍ナリト公文書ヲ
 査見ス一結ハシト總テ物ハ表裡アリ結ハ裡面ノ
 事實ヲ元調査セラルハ我々是以上茲ニ裡面ノ事實ヲ
 腹露スノ徳義ヲウサシ信ス貴方第ニ公府堂ハ
 將軍ニアラスコト他ノ人ナリト及証アリヤ
 (3) 貴族第ニ付テハ辨明ハ左オノ辨明アリ
 (4) 公府堂又ハ此當面ノ事ヲ知ラサシムコト計ヘ出タルナ
 リタルモ計ヘ出タル時ト當面成立ノ時トハ時期ニ異
 ナルヤ人ハ或ハ又當時戰爭前ノ事ヲ誤
 乱ノ折柄ナリハ左代庵ハ公府堂二人ノ年ノ入ナリ

之ヤモ知リス此ハ貴方計テ真相ヲ調査セラル
 能ハリ公文ハ何處又ハ何ノ西ト云フコト其距離ヲ示サズ
 此協議ニヨリテ之ヲ決ス外ナシ露國側ノ証據ハ特政
 府ノ知ラサシハ承認スル得ス若シ他ニ有力ナル証
 據ナラハ此圖面全作ヲ鑑ミナリトシ總テ智又ハ此意
 政府ヘ提出スル能ク
 我曰ク如何ニ多數ノ証據ヲ提出スモ之ハ貴國官署
 ノ公文ニアラサシハ承認スル能ハスト云ハルコト計テハ徒勞ニ
 屬ス我方ニ於テハ此外許多ノ証據書籍アルモ提
 出セサルハ元來撫順崖坑ハ戰爭ニヨリテ獲得シ而シ貴國
 之ノ承諾ヲ得ハスモナリハ最初露國人カ如何ナルマテヲ鑑ミナリトシ



取扱へルヤ之付露国人側証據ヲ提出スルハ至當事ニシテ
 貴方ノ之ヲ無視セラルハ理由ナキナリ又之國ト國トノ
 裁判ニ屬リテ貴國ノ公文ニテ示レハ之ヲ承認スルハスト
 云々ハ不當事ナリト又又知ラハ貴國官憲ノ公
 文書類ニ蒐集スル便宜ヲ有セザンナリ
 彼曰リ撫順ハ我國ノ領土ニシテ我ノ行政ノ下ニ在リ故ニ我國ノ
 許可ヲ爲シタルノ付ニ公文ノ証據アルニアラザル人ノ之ヲ
 承認スル能ハズ
 我曰リ然ラハ露國ノ証據書類ハ全ク承認セムト云
 へルカ
 彼曰リ決シテ其意味ヲ了ラズ大伴ニ於テハ承認スル其

細目ニ鑑ミテ範圍ヲ定メ付テ露國人ノ書類
 ノ之ヲ以テ証據ト爲ス能ハズトナリ
 我曰リ今清國ハ將軍ナリト仲ニ付公文ノ証據ヲ要
 スルカ如キハ無理ノ注文ナリ此種ノ事決シテ公然其
 名ヲ表トスルハ性質モ之アラズ
 彼曰リ吾ハ將軍若シ林邊ニテ必要アラハ其名ヲ以テ
 之ヲ買フハ決シテ悪シキナリト又又吾ニゾ後名ヲ用フルノ
 要アラズヤ予ハ現ニ露社ノ林ヲ有スルモ公然予自身
 ノ名ヲ以テ之ヲ有セリ且下等モ亦然ルナリ
 我曰リ許可ヲ受クニヤ地位ニ在ル將軍カ自ラ林主トシ
 ナシハ其名ヲ表セラルハ當然ナリ又又外人ノ關係ニ屬

社に地入るる處より當時の狀勢を察せ公然之を告ぐ
を得てや今日我々が普通通之會社に林を賣つた趣意を
云ふ我々が提議したる証據を打消ふか否か又証を棄つ
能はるや而かも之を承認せん能はるや云々の不可なり申さ
るるし公濟院の將軍にアタマト云うたら何人ナリト云フコト
ヲ示して之を辨明せうんアウヌ人我々の確信ヲ
動かスコト能はる。

彼日同部領事存藏頃公文にコレハ新也龍神坎
ニ採掘ヲ許可セト云フ處より境界問題の確證
云々其儘に爲し置ても否と記載アリ故に貴方我
等此頃新也龍神坎の鑛區を以て意見ナかりしハ

明らかナリ

我日否ナ鑛場ハ片坑繼承ノ當所ヲ決定し居し
る新也龍神坎の方面ハ今俄かに南極と署名せん見
ルナカリシヲ以て其儘に爲し置ても否と

彼日同部領事存藏頃其儘に爲し置ても否と付今回
會議に於て之を定メント欲す我々が主張する新也龍
神坎の南極と署名せん見ルナカリシヲ以て其儘に爲し置ても否と

我日たレダケニテ宜シキヤ
彼日ハ是ハ河東ニ付テ事ナリ新也龍神坎の鑛區
組止ト云フ歐西並側証據ハ之を承認せん貴方
提議ノ五箇条理由内第四第五ハ最も有力ノ証

横をうんも是ハ露國ノ証據ナリ之ヲ承認ス他
 々其地ノ年一ヨリ第三回ノ証據ク皆其地ノ
 弱ニシテ採ルニ足らんナリ
 我曰く然る人第一ノ証據ハ股票執照ハ承認セザルヤ
 (此時股票執照ノ原文雖形アリ
 被曰く之ハ承認ス
 我曰く確カ承認セらんヤ
 被曰く然り承認ス
 我曰く然る人此股票執照ニ付ハ何故東等其煤
 礦所有一帶ト云フ明文カニヤラズヤ海軍一帯アリ
 ル石炭ノ在ル所ヲ鑑区トせんヲ指ス事アラズヤ

被曰く支那人ハ普通ニ一帯ト云フ文字ヲ用ユモ斯
 廣キ意味ニアラス鑛業ヲ法實施以前ハ屢斯
 如キ空想ナル文字ヲ用ヒタリ
 我曰く此明白ナル文字ヲ打消サントセらんハ貴方ハ解ナ
 リト認め
 被曰く此文字ヲ斯ク廣ク解セらんハ貴方ハ解ナリト
 認め當時支那政府ハ此ノ如キ廣大ナル鑛区ヲ一人
 許可シタリトハ如何ニシテモ相像スル得ス
 我曰く或ハ此ノ特權ノ許可シタル時代ハ此ノ如キ
 廣大ナル鑛区ヲ知ラザリシナリ然レ代許可シタル
 之ヲ経過シタル露國人ハ其廣大ナルヲ知ル其年

部ヲ鑛區ト爲シタルハ先年台以來ハ所テ点々
 鑛ヲ施シタル形跡ニ徴シテ之ヲ知ラルヘシ去シム之ヲ鑛
 シタル日本カ其屋部ヲ要求スルハ當然ノ一ツアラフヤ
 彼曰ク我方ニ於テハ已ニ新也精神坎々以爲咀子ニ對
 シテ人民ノ擁護ヲ許可シアルハ今之ヲ貴國ニ譲ルトモ
 人民ハ直ニ其中央政府ニ訴ヘ出ルヘシ本日ハ人民ノ努力
 強シレハ我方大ニ困難ス又彼等ハ何レモ二三万兩賣
 本ヲ投シ居ルハ今之ヲ控失セシムルハ忍ビス撫順ノ炭坑
 ハ一日ニ七千噸ノ出ル所モ尚四百萬兩ヲ支フルハ炭
 坑ナリト解リ此聽リ以テたんに炭坑ト相立セテ清國人民
 カカ炭坑ヲ以テ而カモ鐵道ヲ有セシテ之ヲ封定セシムトハ

不可能事ナリ知ルト雖モ已ニ此等事ヲ投シ来シルモ
 今ハ新也以來ヲ各割シテ之ヲ承認セシタルシ
 我曰ク我々今日ノ困難アルハ今ヲ知レル以テ清國人民
 カ我鑛區内ニ於テ採炭ヲ開始スル都度直ニ貴
 方ニ抗議シテ許可ヲ取消ヲ要求シタルハ然ルニ貴方人
 之ヲ用ヒテテ等閑ニ打撲テ来リタルモナシハ今日此等
 ノ採炭者カ蒙ル所ノ損害ニ類ラリ貴方ノ人買ハ權
 云々モナリ
 備考右ニテ本日ノ會議ヲ閉セリト云ヒテ當リ彼等
 實如トシテ左ノ事ヲ申出テタリ
 彼曰ク然ラハ鑛區ニ付テハ如何オド讓與セラルヤ

我曰く我鐵區の昔より確立して此圖面を今圖ノ
層議爲る特作製したるモノアラカ炭坑鐵軌
當初より存続せんモノなり故に鐵區に付テハ一歩モ
譲ルコト能ハス

彼曰く貴隊費より於テモ支給三十三年頃ハ是レガ
ケテ鐵區とせん考ナカリシコアラカヤ

我曰く否ナ初より是レガケテ鐵區と爲し來リシモノナリ
彼曰く貴方ノ於テモ此頃こそウケ炭坑ノ大ナリシヲ知
リタルコアラカヤ

我曰く否ナ炭坑ノ大ナルハ兩國人已之ヲ知レリ去レハ
日韓對等際露ノ左翼軍撫順ヲ退却スル當

リテ或將軍ハ此炭坑ヲ棄ツルハ一個師團兵ヲ全
滅セシムルモノ惜シムヘシト嘆息ナリト云フ語アリ

彼曰く我方ノ於テモ是レケテ鐵區トせん確実ノ證據ナリ
ハ北京へ上申せん純々又已シ許可ヲ受ケ當分ヲ授シ
て人民ノ地位ヲモ尊重セウレタシ

我曰く一鐵區内ニ於テ二個以上ノ採炭會社アルトキハ
到底二面を純々スルヲ完平ノ樂州ノ如キ不幸ノ地
位ニ陷ルル事情ヲ察セウレタシ

備考右コト閉會入予ハ炭坑ニ於テ止テ得ル
用務アリ時地等ハカキルヲ以テ來ルナリ日迄
會議ヲ延期セト欲スル上ヨリ陳べしコト

洋使に我方の此問題ノ解決ヲ急カ
スルハ今ナレバ早ク進行スル様出来
トカ他方ニ懇請コタリ仍リテ然ラ
ズルニ十二三日頃出奉ルヘキ旨ヲ約
シテ片屬又

撫烟兩炭坑細則ニ關スル第五回會議録

(七月十四日奉天交渉司ニ於テ全委員出席)

撫順炭坑鑛區問題續キ

我曰ク撫順炭坑鑛區問題ニ付テハ證據ヲ擧ケテ論究セリ
貴方之ヲ承認セラルナラハ可ナクモ然ラサルニ於テハ同一ノ論ニ目
ヲ及覆スルモ詮ナレ故ニ撫順炭坑ノ問題ハ此位ニ止メ置キ以
烟台炭坑ノ鑛區問題ニ移ラント欲ス如何
彼曰ク烟台炭坑ノ問題ハ比較的單純ナルヘント思フ折角今
日マデ双方ノ主張点ヲ論究シ来リタレハ引續キ撫順問題ヲ
議シ然ル後烟台ノ問題ニ移ラント欲ス

我曰ク我方ハ兎ニ角材料ヲ提供シテ炭層全部ヲ鑛區

四十三號十二月十日記

龍受

トる理由ヲ説明シタルモノナレハ單、之ヲ承認スル能ハスト
云ハル、位ニテハ義服スル能ハス貴方ハ新屯以東ヲ分割セシ
ト云ハル、モ之ニ關スル何等ノ證據ナキニアラスヤ

彼曰ク 我方ハ光緒ニ十七年八月二十六日ノ増旗將軍ノ上
奏書ニヨリテ新屯ヲ界ト為サント欲ス此上奏書ニ撫順
界内ノ千山台炭礦云々ノ語アリ乃チ公府尙ノ許可ヲ受ケ
タル鑛區ハ撫順界内ノ千山台炭坑ナリ新屯以東ハ撫順界ニア
ラステ興京界ナリ乃チ河東區ニ付テハ領地界ニヨリ撫
順界ヲ以テ境界ト為サレトシ主張ス

我曰ク 上奏文ニハ千山台炭礦トアリ何故ニ楊伯堡、老
席台等ヲ包含セズ千金寨ニ限ルト主張セラレサルヤ

彼曰ク 千金寨ノ山ハ千山台ト稱スルモ新屯南方ノ山ヲ朝
陽山ト稱スル故ニ新屯方面ハ包含ス

我曰ク 光緒ニ十七年増旗將軍カ上奏シタル當時ハ炭礦
ニ付テ何等知ル所ナカリシナリ然ルニ王公府ニ人開採ニ着手
シ且露人カ来リテ之ニ参加スルニ至リテ始メテ山炭層ノ大サ
ルヲ知シナリ此事ハ前ニモ云ヘル如ク老席台以東ニ於テ露
人ウ点々試鑛ヲ施シタル事實ニ依リテ之ヲ証スルニ足ル
故ニ露人カ鑛區トシテ取扱ヘルニ部ハ我ニ於テ之ヲ我
鑛區ナリト主張スルハ当然ナリ

彼曰ク 露人ハ鑛區ノ公府ヨリ買ヒ翁ハ將軍ノ許可ヲ
受ケ而シテ此許可ハ將軍ノ上奏ニ基クモノナレハ上奏書

：依りて決定セサルヘカラス故：新此以來ハ之ヲ貴方ノ鑛區
トスルコトヲ承認ス能ハス

我曰ク 我方ハ將軍ノ上奏書ニヨリテ炭坑ヲ得タルミアラ
ス又公認ヲ買ヒタルミアラス戦争ノ結果條約ノ効カニヨリ
テ炭坑ヲ得タルモノナレハ露人ノ鑛區トセル處ヲ継承シ
シルナリ

又曰ク 撫順問題：付テハ炭層ノ全部ヲ鑛區トスルコト
ニ付前日未詳悉ヒリ此位ニ止メ置キテハ如何問題ノ全
体ニ及リテ双方ノ主張点ヲ明ニスル：アラスレバ取捨ノ
便宜ナレ

彼曰ク 一々左端ヨリ問題ヲ決定セシト欲ス此問題ヲ

田三

中止シテ他ニ移ルモ別ニ進行ニ益ナカルベシ

我曰ク 我方ノ意見ハ充分ハ吐露セタリ之ハ打消サレト欲
セハ反証ヲ舉テ説明セラルヘシ之ニ及レテ貴方ノ意見見
ハ何等見ルヘキ理由ナキニラスヤ

彼曰ク 貴説ノ内第四ト第五トハ露人ノ開スル証據ニ
シテ取ルニ足ラス又第一ヨリ第三ニ至ル理由ハ已ニ反駁
セシカ如ク極メテ薄弱ナルモノナリ故ニ承認スル能ハス

我曰ク 兎ニ角証據ヲ舉テテ理由ヲ説明シタルモノナ
レハ承認スル能ハストオハル位ニテハ我々ハ満足スル能ハス
彼曰ク 河東ニ付テハ我方ノ意見見テ陳ベタリ是ヨリ
河西ニ付テハ我方ノ意見見テ陳ベシ

河西ニ付テハ何故、斯ナル廣大ナル面積ヲ要求セラルヤ
我曰ク、山岳層全部ヲ鑛區トスルハ前ニ主張セシ處ナリ
條約ニ所謂撫順炭坑ナモ、炭層ノ一部ナリト解釋ス
ル能ハス

彼曰ク、條約ニ境界ヲ示サス然ルニ何故、此箇面ナリ
鑛區トセラルヤ

我曰ク、貴國人民ノ書類及シ露國人民ノ書類等ミヨリ
石灰分布區全部ヲ我カ鑛區トスル下リ貴方ハ何處ヲ
以テ境界ト為サレト欲スルヤ

彼曰ク、古城子ノ村長ノ報告ニ據ルニ、光緒三十四年山岳坑
ハ古城子河ノ東ニ木標ヲ立テ之ニ南滿洲鐵道株式會

田四

社ト記ナリ然ルニ一昨年即チ宣統元年、其木標ヲ拔
キ去リテ西方ニ移轉シテ鑛區ヲ擴メタリ又小瓢屯村長
ノ報告ニ據ルニ本年五月同村ニ在リタル木標ヲ更ニ村南
ノ丘上ニ移セリ炭坑ハ此如ク勝手ニ木標ヲ移シテ鑛區ヲ
擴メラルモ我方ハ之ヲ承認スル能ハス 我方ハ河西區ニ
付テハ古城子河ヲ以テ境界ト為サント欲ス

我曰ク、夫ハ村長報告ノ誤ナリ前キモ古ハル如此鑛區ハ
炭坑継承當時ヨリ確定セシモノシテ光緒三十三年、陶
太均氏ニ提出セル箇面ト今日ノ箇面ト同一ナリ炭坑ノ測
量者ハ三角測量ヲ為ス、當リテ諸處ニ木標ヲ立ツル
コトアリ此木標ヲ誤解シテ思標ト思ヒナリ兎ニ角鑛界

標ハ今回斯カル會議アルコトヲ夢想タモセザリレ昔モ
於テ立テタルモノニシテ我方ニ於テ之ヲ伸縮スルノ餘地ナ
キモノナリ

彼曰ク 貴方ヨリ提出シタル案ニ古城子河ヲ以テ界ト
スルコトヲ記載スル然ラハ貴方ハ已ニ古城子河ヲ界ト
スルコトヲ承認セルニアラスヤ

我曰ク 鑛區ノ境界ヲ文章ニ表ハスニ當リテ一々地名ヲ
擧ゲテ之ヲ示スコトハ不可能事ナレハ大体ノ四至ハ天然ノ
地物ヲ以テ表ハスコト、シ而シテ末項ニ以テ鑛界ハ附録面
面ヲ以テ明ホストモリ貴方ハ第一項ノ文字ヲ見テ末項
ノ文字ヲ顧ミサレトスルカ

四五

彼曰ク 我方ハ兎ニ角村長ノ報告ヲ以テ真ナリトシ古城
子河ヲ界トセシム

我曰ク 村長ノ報告ノ誤レハ已ニ説明セル所ナリ其
他ニ之ヲ界トスル根據ナキヤ貴方ハ古城子河ヲ以テ界ト
シ其以西ヲ如何セルトセラルヤ

彼曰ク 人民ノ採掘セシムルモ可ナリ

我曰ク 鑛區ハ炭坑継業當時ヨリ確定セモ、ミレニ
今回ノ會議ノ為メ特ニ作製セシ局面、アラハ不幸
ニシテ其モ削減スルノ餘地ナシ故ニ此局面ノ界線ヲ一寸
タリトモ譲ルト能ハス

烟臺炭坑鑛區問題

彼曰ク 是ヨリ烟台ニ移ラシ烟台炭坑ハ前ニ龍票ト稱スル許可証アリテ幾個ノ人ニ分レ居リタルモノナレハ支那人ガ此龍票ヲ兩該國人ニ賣リタル証據アリハ我方之ヲ承認ス可シ

我曰ク 我方ノ提出シタル面而ヲ鑛區ナリトシテ要求スルミナ一々証據ヲ出セトセハルニヤ

彼曰ク 然リ之ヲ賣リタル証據アリハ承認スヘシ

我曰ク 撫順ノ鑛區ニ付テハ我方先ツ五個ノ理由及ヒ証據ヲ舉ゲテ説明シタリ這回ハ貴方ヨリ我要求ニ對シテ及証アリハ之ヲ舉ゲテ説明ヲ願ヒタシ

田六

彼曰ク 貴方提出ノ原案ニハ烟台炭坑ノ鑛區ハ何山何山ト記載セシレアリ之ハ一々龍票アリ之ヲ賣リタル証據アリハ承認セン

我曰ク 龍票ヲ賣リタル証據アリハ承認セントセハルモ我ハ單ニ龍票ヲ賣リタルモノミナラス後令ハ一年若キト租銀ヲ納シテ貸シタルモノ又ハ東清鐵道ヲ他人ヲシテ經營セシメタルモノミナモボリツマス條約ニ所謂同鐵道ニ屬シ又ハ其利益ノ為メニ經營セシムル一切ノ炭坑ハ我鑛區ト為スヘキモノト思フ

彼曰ク 賣リタルモノミナアサルモ貸シタルモノミナ承認スベシ

我曰ク 我提出シタル圖面ニ付何處ハ可ナリ何處ハ不可
ナリト云フ證據アリハ其説明ヲ兼リクシ
彼曰ク 我方ノ調査ニテハ烟台ノ票主八人トモ悉ク之
ヲ賣リ又ハ貸シタリト云フ證據ナレト思フ
我曰ク 然ラハ北京政府カ採掘權ヲ認メタル此炭坑
ハ何等ノ證據ナクシテ認メタリト云ハルニヤ
彼曰ク 露國人ノ採炭セルコトハ承認ス或ハ一二ノ支
那人ハ之ヲ賣リ又ハ貸シタルカハ知ラズ
我曰ク 我方ハ東清鐵道ヨリ許多ノ證據書類ヲ引
継シ受ケタレハ之ヲ提出スルコトハ容易ナリ然レトモ
已ニ無順ノ問題ニ於テ若キ經驗ヲ當メタル如ク

田七

貴方ハ露國人ノ證據ハ承認スル能ハスト云ハルニ由リ
之ヲ提出スルモ無益ナリ故ニ我方ハ原案ヲ以テ要求スル鑛
區ノ範圍ニ付之ヲ否認セルトル及証アリハ之ヲ舉示セラ
レタレ

彼曰ク 支那人民カ露國人ニ對シテ炭坑ヲ賣リ又ハ貸シ
タル證據アリハ露國人ノ證據ト雖モ之ヲ本當ノ證據
トシテ承認セシ我方ノ調査ニテハ支那カ之ヲ賣リ又ハ
貸シタルコトハ之ヲ承認ム

我曰ク 然ラハ露國人カ權利ナクシテ採炭シタルモノナリ
ト云ハルニヤ又之ヲ譲リタル北京協約ハ日本ハ權利ヲ
有セザリシ露國ヨリ之ヲ継承セリト云ハルニヤ

彼曰ク 否ナ北京政府カ日本ニ採掘権ヲ許セルハ露國
人カ採炭シ居リタレハナリ露國人カ採炭セルハ一人カ二人
カノ支那人カ之ヲ賣ルカ又ハ貸スカヲ為シタレハナリ只條
約ハ採掘権ヲ認メタルノミナレハ今ハ其境界ヲ定メ
レト欲スルノミ
我曰ク 然ラハ露國カ權利ヲ有シテ採炭セルヲ認ム
ルヤ

彼曰ク 之ヲ認ム

我曰ク 露國カ經營セルモノヲ我カ條約ニヨリテ引受
ケタルノ事實ヲ認ムルヤ

彼曰ク 之ヲ認ム只區域ハ定メサル可キ

田八

我曰ク 我方ハ原案ヲ提出シテ一定ノ要求ヲ為セリ貴
方若シ之ヲ否認セラルハナリ何處ガ可何處ガ不可トマ
反証ヲ舉ゲテ攻撃ノ態度ニ出テタルベキハ當然ノ順序
ニアラスヤ故ニ先ツ貴説ヲ兼ハラシ

彼曰ク 撫順炭坑ト異ナリ各龍票ニ四至アリ境界ヲ
定メ易シ何故ニ貴方ハ之レダケヲ要求セラルヤ

我曰ク 我方ニ於テ此畫面ダケヲ鑛區ナリト主張スル所
以ハ是レダケノ処ヲ即チ露國ノ經營セシ所ナレバナリ
彼曰ク 露國ノ經營セシ所ハ磨臍山下ノ一小部分
アラズヤ

我曰ク 否ナ露國ハ磨臍山下ニ鑛坑ヲ穿チテ炭坑

北半ノ石炭ヲ出シ又茨見山下ニモ堅坑ヲ穿テ石炭坑
南半ノ石炭ヲ出サレセルモノナリ
彼曰クニテ所々堅坑ヲ穿ツモ一部分ノ石炭ヲ出ス過
ギスレテ全体ヲ鑛區トスル理由トナラス
我曰ク否ナ堅坑ヲ穿テハ周圍三十町位ノ石炭ヲ出ス
コトヲ得ベレ全体ヲ鑛區トスルニアラズレバ堅坑ヲ穿ツ
ノ甲斐ナレ

備考 烟台鑛區ニ付テハ清國側が如何ナル程度ニデ
調査行届ケルカヲ探知セシト欲シテ我方ノ所見
ヲ陳ベズ連リニ先方ノ反証ヲ舉ケレメレヲ
勉メタリ彼亦先ツ我方ヨリ証據ヲ提出セレメ

田丸

トシテ具體的ノ意見ヲ陳ベズ然ルミ石ノ間
答中先方ノ提出セル圖面書類ヲ閲覧スルミ
已租區未租區等ニ付稍正確ノ調査行届キ
居ルヲ發見セタルヲ以テ明日ノ會議ニ於テ具
體的ニ意見ヲ陳フルト決心ス

煙台炭坑細則ニ關スル第六回會議錄

(七月十五日交渉司ニ於テ全員出席)

煙台炭坑鑛區問題續キ

彼曰ク撫順炭坑鑛區問題ニ付テハ貴方綿密ナル調査ヲ遂ケラレタルモ煙台炭坑ニ付テハ充分調査セラレサリシモノ、如シ

我曰ク我方、於テ煙台炭坑ノ鑛區トシテ面商ヲ添ヘテ要求スル処ハ總テ以テ等ノ土地カ元來東清鐵道ニ屬シ又ハ其利益ノ為メニ經營セラレタル処ナリレヲ以テ條約ニ據リ當然我ニ屬スルニ由ル故ニ支那人ノ鑛主即チ乾果ノ持主ハ其鑛區ヲ同鐵道ニ賣渡シタルモノハ勿論ノコトニシテ此外ハ

要復審

四十二年十一月十日記錄一部受

一箇年若干ノ租銀ヲ納シテ之ヲ露國ニ貸渡シタルモノ又ハ
東清鐵道ノ其利益ノ爲ノニ他人ノ名義ヲ以テ開採セシノ
タルモノヲモ包含スルナリ約言セハ同鐵道ニ屬シ又其利益
ノ爲ノニ經營セラルタル炭坑タル以上其獲得原因ノ何タルヲ
論セス總テ我ニ歸屬スルモノトス今ヤ詳細ノ理由ヲ陳フルニ
先ダテ大體論トシテ貴方ニ此主義ヲ承認セラシムコトヲ望ム
彼日ノ東清鐵道ノ利益ノ爲ノニ經營セラルタルモノヲ鑛區ト
スルコトヲ承認ス然レモ果シテ同鐵道ノ利益ノ爲ノニ經營セ
ラレタルモノナリヤハ細目ニ互リテ承認スアラザレハ判斷スルコト
ヲ得ズ

我曰ク烟台炭田ハ嘉慶年間皇室ヨリ下附シタル八個ノ

龍票即チ八鑛區ニ分割セラレ別ニ其南方ニ尾明山ト稱
スル一ノ彩票區アリタリ故ニ以上ノ九鑛區ヲ以テ現在ノ烟台炭
田ヲ組成ス條約ニ所謂烟台炭田トハ此一團ノ炭田ヲ指スモ
ノニシテ分割スルヲ得サルモノナリ

烟台炭坑ニ外國人ノ着手セルハ光緒二十一年某英國人ヲ光
子山ノ西腹ニ坑口ヲ開掘シ探炭ニ從事セルヲ以テ始メトス降
テ光緒二十六年ニ至リ東清鐵道會社ヲ立テ五鑛區ヲ銀五
萬八千兩即チ八萬二千八百五十七兩十四仙ヲ以テ買収シ且此買収
ハ遼陽知州ノ許可ニヨリテ行ハレタリ

票主名	所在地	銀額
韓潮	磨臍山	一八〇〇兩

赫松林	他家窪	一〇、〇〇〇、〇〇
祝恩陸	硯盛堡	一〇、〇〇〇、〇〇
劉祿秀	茨見山	一〇、〇〇〇、〇〇
李潤	大窩	一〇、〇〇〇、〇〇
計		五八、〇〇〇、〇〇

此換算八万二千八百五十七兩十四仙

此五鎮區、東清鐵道會社、賣渡サレタルモノニシテ同鐵道ニ屬スルモノナリ

殘餘、三龍票區ノ内票主王振綱ニ屬スルモノニテアリ其
一タル鐮子峯區ハ東清鐵道會社カ毎年五百二十兩ヲ又
拂ヒテ租借シタルモノニシテ其租借期限ノ有効中ニ我軍

小三

ノ占領ニ歸シタルモノニシテ同鐵道ノ利益ノ為ノニ經營セ
ラレタル炭坑タルコトハ疑ヲ容ル、餘地ナシ他、一タル茨見山
南區ハ同鐵道カ其人夫頭タル呂仁成ナルモノヲシテ票主ヨリ
租借ニテ經營セラルタル處ニシテ是亦同鐵道ノ利益ノ為ノ
ニ經營セラレタル炭坑タルモノトス

最後、一龍票區、老席臺ノ趙家票ハ八區中ノ最小區
ニシテ東清鐵道カ買収セシヤ租借セシヤハ目下我方
ノ調査中ニ屬スト、同鐵道カ之ヲ買収又ハ租借セシ
テ其南北ハ堅坑ヲ開鑿スル苦ナケレハ二者ノ内何一カニ屬
スルモノト想像ス、仮リ一歩ヲ譲リ同鐵道カ之ヲ買収又ハ
租借セサリレトスルモ同鐵道ノ利益ノ為ノニ經營セラレタル

炭坑タルコトハ著明ノ事實ナルヲ以テ當然我方ニ帰属ス
炭田ノ最南端タル尾明山係光緒二十三年ヨリ二十七年ニ至
ル五ヶ年間劉清瀾及ヒ李煥堯モ二人ノ名義ヲ以テ彩票
ヲ所有セリ是亦露國ノ參加者所トナリ清露合同ノ採
炭會社即チ天利公司ナルモノ、所有ニ歸レ光緒二十七年
十二月即チ千九百二年一月尾明山採礦章程ナルモノヲ作
リテ資本金ヲ二万兩トシ清國人李席珍等及ヒ東清鐵
道ニ關係アル紀道夫(キートン)ノ代理人因蘭亭各一万
兩ヲ出資シ同鐵道ノ利益ノ為メ經營セラル炭坑タル
コトハ疑フ可ラサル事實ニシテ我方ノ鑛區ニ屬シタルモノナ
リ之ヲ今日マテ人民ノ採掘ニ委シタル所以ニ就カテ於テ敢テ

ハ四

我權利ヲ抛棄セルニテラスハ彼等土民ノ採炭量少ナリ
且僅ニ冬期中ニ採炭スルニ止ラシハ地方土民ヲ救恤スルノ
意味ヨリ之ヲ默許シタルモノナリ
以上詳細ノ理由ニヨリ烟台炭田全部ハ總テ我ニ屬スルモ
ノミテ此鑛區面ヲ以テ正當ノモノト為スナリ
彼曰ク尾明山章程ナルモノハナシ此ノ如キコトハ我方ニ於
テ始メテ聞キタリ若シ此ノ如キ章程アリトセハ夫ハ各國
人ノ勝手ニ作製シタルモノナラン
我曰ク公刊ノ書籍ニテモ登載セラレアリ茲ニ契約條文
ノ摘要ヲ有セリ貴方史シテモナシト云ハル、マ
彼曰ク斷シテ此ノ如キ章程ナシ

我曰、我々勝手ニ此章程ヲ製造シタルモノニアラス貴方
今更ニ調査セシメ然ルヘシ
彼曰、今陳ベタルハ、所ノ龍栗區ノ内其五ヶ所ハ東清
鐵道ニ租賃シタルモノナレハ之ヲ貴國ノ鑛區ト爲スコトヲ
承認ス但其境界ハ各牒票ニ四至ノ記載アルヲ以テ之
ニ依リテ實地ニ査テ定メサル可ラス祝恩隆、劉福壽、
李國ノ三區ハ此方ノ畧圖ト異ナレリ王振綱ハ呂仁成ト
契約セリト云フハ光緒三十一年ノ事ニシテ戰争後ノ事
ナリ同人ハ開採ニ着手セス何トナレハ趙將軍ニ其契約ヲ
取消セシメバナリ故ニ之ハ承認スル能ハス
我曰、呂仁成ハ露ノ人夫頭トシテ王、鎮區ヲ租借セリト

小五

おハ勿論戰争前ノ事ナリ貴方ノ戰争後ノ契約ニシテ
將軍ニ取消セシメタリト云ハルハ呂仁成ト米國人トクトル
コトマン」ト契約ノ事ナラン
彼曰、呂仁成ト米國人ト契約ニ何等ノ關係ナシ光緒三十三年
在營口ノ米國領事ヨリ照會アリテ或米人ハ茨兒山ノ採
炭權ヲ得タリト申来レルヲアリ當時趙將軍ハ王振綱
ヲ呼出シテ取調ハタルニ王ハ夫ハ自分ニ於テ何等ノ關係ナ
シ呂仁成ハ獨斷ニテ約束シタルモノナラント云ヘリ仍リテ將
軍ハ王ト呂仁成トノ契約ヲ取消シタルヲアリ此事ハ別問題
ナリ又曰、趙沛恩ハ後継者趙治臣ノ申立ニヨレハ同人ハ
東清鐵道ヨリ何等ノ金ヲ受ケタルコトナシト云ヘリ又曰、

王振綱ノ申立ニ依ル鍾子峯區ヲ東清鐵道ニ貸渡シタル
コトナント云ヘリ
我曰ク露國ハ鍾子峯區ト茨見山下トニ開坑セルモノナレハ其
中間ノ老弗峯區ヲ買収又ハ租借セラル理由ナシト思フ
彼曰ク夫ハ想像ナリ我方ニ於テモ想像ヲ逞フスルハ露
國ノ一面撫順ヲ經營セサル可ラサルニ他方烟台カヲ入
テ一層大ナル經營ヲ為ス筈ナシト思フ露國ハニテ形ニ整
坑ヲ穿ツト云フコトノ外老弗峯區ニ於テ何等ノ考ナカリ
シト思ハル之ヲ要スルニ東清鐵道カ已代金ヲ拂ヒタル五
鐘區ニ於テハ異議ナシ此上四區ヲ定ムル可ナリ他ノ三區ニ
付テハ承認スル能ハス

小六

我曰ク東清鐵道ニ代金ヲ拂ハヌ又ハ租借ヲ為サスシテ他人
ノ鐘區ヲ占有セリトセハ夫ハ東清鐵道ト票主トノ關係ナリ
我ハ原因ノ如何ニ拘ハラス我ニ歸屬スト云ヒタルハ大体論
ニ於テ述ベタリ

彼曰ク東清鐵道ニ歸スナリシモノヲ取ルノ權ナシト思フ
我曰ク三區中一タル鍾子峯區ハ東清鐵道ニ毎年五
百ニテ兩ヲ拂ヒテ租借シタルモノニシテ現ニ當時ノ願書
及ビ契約書アリ且東清鐵道ハ現ニ此區中ニ坑口ヲ開キ
テリ之レヲモ租借ノ事實ナシト云ハルヤ
彼曰ク開坑セシハ鍾子峯區ノ内ニテラスシテ此處ナリ(先
方ノ面ヲ示ス)

我曰、否、鐸子峯区内ナリ此圖ハ誤レリ
彼曰、東清鐵道ノ開坑モレハ鐸子峯区内ナラハ之ヲ
譲ルコトヲ承認ス但實地ニテ四里ヲ計算シタル上之ヲ
定ム

又曰、王ノ屬スル茨見山區ハ露國ノ人夫頭タル呂仁成カ
露ノ為メニ經營セリト云ハル、モ決シテ然ラス當時露人
ハ米リテ色々ノ事ヲ為セリト雖モ總テ之ヲ東清鐵道ノ
為メニ為シタリト解釈スルコト能ハム故ニ之ヲ鑛區ニ入ル
コトヲ承認スル能ハム趙家ノ老爺峯區ハ東清鐵道カ
買収スル租借セシナラント云ハル、モ其証據ナレハ之ヲ鑛區
トスルハ絶対的ニ承認スルヲ能ハス

小七

我曰、茨見山モ老爺峯モ總テ東清鐵道ノ經營シタル處ナ
レハ之ヲ鑛區ニ編入スルハ至當ノコトナリ

又曰、尾明山區ニ付テハ異議ナキヤ

彼曰、尾明山ハ貴國ニ於テ已ニ承認シタル処ニアラスヤ

我曰、只默許ニ付レ置キタルノミ必要アラハ何時ニテモ之
ヲ回收ス

又曰、貴方ハ尾明山採礦章程ヲ承認スルヤ如何

彼曰、此クノ如キ章程ハ決シテ我國ニナシ

我曰、已ニ公刊ノ書籍ニ登載セラレ且此合同契約ハ外
務部ノ登記ヲ經タリトマテ記載アリ貴方ハ一應北京
外務部ノ問合ニサレテハ如何

彼曰ク此ノ如キモノハアルベキ筈ナレ故ニ問合スベキ必要ヲ
認メス

我曰ク尾明山ハ從來土民ノ開採ヲ默許シアリタレトモ今
田之ヲ回收シテ我方ノ鑛區ニ編入セント欲ス

彼曰ク三十三年六月秋京總領事ハ公文ヲ以テ尾明山ヲ

弟認セルニアラヌヤ

我曰ク吏ハ姑ノヲ弟ハレリ一應調査スヘシ

又曰ク趙治臣ハ就票ヲ有スルヤ

彼曰ク總テノ就票ハ皆アリ東清鉄道ニ賣リタルモノモ龍
票ハ當方ニアリ

我曰ク趙ノ就票ハ確カニ在リヤ

ハ

彼曰ク本人ニ未ダ有無ヲ問ガスト雖モアルベキ筈ナリ

又曰ク東清鉄道ニ賣リタル五ヶ處ノ鑛區ハ弟認ス鐘

子峯區ハ坑口ヲ開キタル跡アラハ弟認スヘシ茨見山ト老

弟峯ハ絶對ニ弟認スル能ハス

撫烟兩炭坑細則之関入第七回會議録

(七月十六日全委及出席)

我日ノ税金問題ニ入ルニ先ケ該二區ノ件ニ関シ尙ホ一言
シタリ

彼曰ク可ナリ

我曰フ昨日貴説ノ前件所屬總領事ヨリ差出シタリト
云フ書類ハ搜索シタムモ見當ラズ貴方ヨリ一覽シタレ
又タ昨日尾明山探礦章程アルモノナシト陳ハシタルモ
尾明山區ニ關スル露國ト合同英約文ハ約章匯覽ニ
アリ貴覽ニ供ス

備考 約章匯覽ヲ示セリ
四十二年二月二十日記録一部受

彼曰ク 本契約以前、取消セリ

我曰ク 何年頃取消サレタルヤ

彼曰ク 日露戰役以前ナリ是、本、私利ナレハ、事

實ニ相違アルモ計ラレス

我曰ク 吾官行ノ事ナリ是、取消文ナレハ、何故ナルヤ

彼曰ク 取消ノ豫陽州街ニ於テシタルモノシテ、外務部、

關係ナキヲ以テナリ事實、取消サレ居レリ

我曰ク 假ニ取消サレタルモノトスルモ、合同契約ノアリタルハ、

拒ク可ラサル事實ナリサレ、曾テ東清鐵道會社ノ

利益ノ爲メ、採掘セラルタルコトハ、疑ナカラム

彼曰ク 史ニ角日露戰役以前ヨリ清國官憲ニ於

テ、独力採掘セルモノナリ、且、本件ヲ本日提議セル貴
意解スルニ苦ム

我曰ク 本日之ヲ提議スル決レテ、煙中ニアラス所有東清
鐵道會社ノ利益ニ供セラルタル事項ヲ調査提議スル
ニ不思議ナレ

且、本件ニ就テハ、去ル明治四十年五月十一日、我、北、京、公、使
ヨリ、慶親王ニ送セル公文ニ「先明山外一ニ、礦、産、ニ、於、テ、
土、民、ノ、採、掘、ヲ、許、可、セ、シ、ハ、全、ク、一、時、地、方、ノ、需、急、ヲ、救、濟、
スルノ、目、的、ニ、由、テ、タ、ル、權、限、ノ、措、置、ニ、シ、テ、我、方、ノ、必、要、ニ、ヨ、リ、
何、時、ニ、モ、右、ノ、許、可、ヲ、撤、回、ス、ル、キ、モ、ノ、タ、ル、ハ、其、當、時、帝、
國、總、領、事、ヲ、奉、天、將、軍、ニ、聲、明、ヲ、經、タ、ル、所、ナ、リ、ト

アリサ秋平總領事ノ屬明山探堀ヲ許可セザリシハ謫
ヲ待タス

彼曰ク然リ默許ノ公文アルモ默許ノ取消文ナレ即チ
我ニ返附セラルタルモノナリ

我曰ク故ニ今回之ヲ回收セント欲ス

彼曰ク公文ヲ以テ默許トアリ明ニ許サレタル意ナラバ
ヤ曾テ我國カ露國ニ與ハタル五領區ノ許可ヲ取消ス
トセハ貴方ニ於テ承諾ヲ與ヘラレヤ云フマテモナリ承諾
セラレザルヘレ以テ例トスヘシ

我曰ク吾貴國ノ全然根本義ヲ誤レリ人アリ家産
ヲ有レ不在中ニ之ヲ某ニ貸與ストセシ主人歸リ来ラリ

某ニ之ヲ返還セザル可ラス此時某若シ之應セズンバ
人何トヤ謂ハム

彼曰ク貴國ノ主客ノ位地ヲ轉倒セリ此例ニ於テ
家主ハ鄰國ナリ

我曰ク吾日本軍ノ同他方各領當時天利公司ハ

明ニ該合同契約ニ依リ探堀シ居タル事實アリ

彼曰ク貴國ノ磨臍山ノ誤ナリ

我曰ク吾屬明山ナリ事實ハ吾定ムカラス

彼曰ク該契約取消ハ明ニ露戰役前ナリ

我曰ク戰役當時調查結果明ニ其同探堀セ
ルヲ以テ我ニ之ヲ占領シ探堀セルナリ

備考 彼黙ス

我曰く而して其は我軍前進撫順ヲ在領シ岩坑ノ
経営ニ全力ヲ注ク必要アリ乃チ烟名岩坑ノ黒貝城
ヲ撫順岩坑ニ移シテ專ラ撫順ヲ經營スルコトセリ烟名
黙許スルコトセリ

彼曰く此が當時既ニ官弁ナリナリ其他ニ黙許
例ナシ

我曰く否我ノ言フ處ハ何レモ精確ナル事實ニシテ
論ヲ以テ破ル可ラス北ノ方ハ日本人ニ黙許シ虎明
山民ニ黙許セリナリ

備考 彼黙スルヲ當時

彼曰く元來貴國ハ虎明山鎮ニ黙許スル權ナシ
我曰く權ナシト云ハ黙許就中何故ニ此モ強義セ

ルヤ貴意解シ難シ

彼曰く虎明山ハ當時明カニ官弁ニ全同契約ハ當時

ノ専任將軍ニ依リ取消サレ居ナリ

我曰く取消ノ有無ハ先ニ前日本軍ニ提供セル事實

ト公文書アリテ如何セシ

備考 彼黙シテ終ラズ

我曰く且ツ取消モ或ハ遼陽州ニ在テセリト云ヒ或ハ

趙奉天將軍ニ在テセリト云ヒ貴侯一ニミシテ明ナラス

彼曰く趙奉天將軍ニ在テ取消セリ

我曰 然レ此 合同 其 約 採 堀 當 時 ト 決 契 約 取 消
 後 ト 負 荷 多 (天 利 分 司) 一 時 然 レ 頗 ル 奇 異 ナ ラ ン ヤ
 備 考 後 以 答 式 以 習 得 上 ト ト 云 式 以 天 利 官 領
 句 以 改 メ 多 リ ト 云 七 明 ナ ラ ン
 我曰 此 等 事 實 以 創 成 否 定 ス 可 カ ン ヤ
 彼曰 點 許 ト 以 當 時 貴 軍 於 予 調 査 ノ 結 果 弊 國
 以 官 兵 十 七 人 知 リ 已 還 セ ン 多 ン ト
 我曰 貴 方 以 主 張 基 上 相 當 証 據 書 類 ナ リ
 ヤ
 彼曰 予
 我曰 取 消 當 時 露 情 兩 當 局 若 何 以 往 決 セ ン 多 ン

文 書 多 ン ヤ レ ト 信 ス
 彼曰 取 消 ノ 証 以 ン 多 西 當 事 者 何 ノ 往 後 文 書 等 以
 予 以 予 以 當 然 ナ リ
 我曰 鑛 業 以 予 重 大 ナ ン 合 同 契 約 解 除 以 當 予
 予 以 予 出 金 金 處 分 式 錢 表 予 理 又 以 物 件 以 處 置
 等 西 者 以 予 種 々 文 書 以 交 換 セ ン 以 予 等 々 當 然
 ナ ラ ン ヤ
 彼曰 予 以 予 將 軍 考 覽 以 借 ス ン 以 得 ヤ
 我曰 多 數 以 書 類 以 詳 知 以 予 以 予 以 予 以 予
 彼曰 取 消 以 書 類 以 主 十 七 人 以 予 他 以 就 以 予 十
 分 搜 索 以 予 以 予

我曰 次ニ尾明山、合同契約ヲ解除セラル、取消ナルヤ
 彼曰 兩當事者ノ意思ニテ解散セラル
 我曰 何故解散セラル、損失ヲモ担ホシヤ
 彼曰 利益アリシヤ
 我曰 利益アリ、何故継続セラルヤ
 彼曰 他ニモ理由アリ
 我曰 其理由如何
 彼曰 唯今不明ナリ調査スルニ
 備考 茲ニ我ニ尾明山、該區ニ関スル主張終ラ
 タル、以テ税金議移ラシ、陳ハ彼語

セ

税金問題

我曰 本件ニ對スル貴意如何
 彼曰 貴案ニ對シテ十分ノ審議ヲ經タリ、原價如何
 ニテ決定セラルヤ
 我曰 否、然ルモ、決斷同ナリ、併シ本問題ヲ議スル
 前、先決問題トシテ第二條ニ規定セル輸出税問題ヲ
 議定シタル
 彼曰 可ナリ
 我曰 條文ニ見ル、如ク本件ハ昨午滿洲協約ニ於テ

滿洲協約ニ於テ

別ニ規定ヲ要セスト最惠率ニ依ルヲ定メタルモノシ
テ其款一メーストスルノ多數ノ實例アリテ明カナルハ滿洲
協約ノ當時即チ昨年九月四日以後一メーストシテ課
スル異議ナキト、思フ貴意如何

備考此時今條ノ加筆、孰チ双方對立セリ

彼曰ク行屬ノ例ニ依ラレタルヤ

我曰ク同等其他ノ例ニ依レリ

彼曰ク蓋知ス

我曰ク滿洲協約締結ノ時ヨリ本率ニ依リ課スルニ

異議ナカラム如何

備考此時大蹊蹠ノ体ヨリ先チ我方ノ意向ヲ全

議セルフトヲ主張セリ

彼曰ク本條ヲ議スル前ニ第一條ノ原價決定ノ方
法ヲ説カレタリ現口原價如何ニテ決定セラルヤ
我曰ク現口原價ハ採掘ニ要スル一切ノ費用即チ知
品賃金俸給等ヲ去ル後額ニ割當テタルモノトス役ニ
付噸ノ採炭ニ付圖ニ要シタル噸價一圖ナルカ如シ貴
國ノ土法採掘等ニ依リ時ニ原價高値トナルハキモ我カ
撫順炭坑ノ如キ洋式大規模ノ採掘ニ在ラハ去ルヨリ
量ナレバ噸價往テ安値ナリ價格ハ毎年三九月間
度ノ會社決算期ニ於テスルコト條文ニ下ルカ如シ
彼曰ク然ラハ原價ノ未定ノモノナラシ

我曰 月々土炭等シカラス 従フテ原價ニ高低アリ
 毎季ヲ通シテ割當テ平均額ヲ以テ噸價トス
 彼曰 然ラバ一定セザルナリ
 我曰 然ル土炭人多ク依リ経費ニ月少ノ相違
 アル免レズ
 彼曰 現付ノ坑口原價何程ナルヤ
 我曰 現付ノ二圖五拾銭内外ナリ
 彼曰 現付ノ土炭高何程ナルヤ
 我曰 二十四三百噸ナリ
 彼曰 將來大山、東、即兩坑其他ノ設備ナリトキ
 土炭高強想如ヤ

我曰 一日六七噸採掘し得ベシ然レトモ之ニ従フ販
 賣ノ關係アレバシレダケ土炭スルヤ否 断言シ難シ
 彼曰 安意釋義セテ原價一定セザルハ弊方ニ於テ
 該税金ノ用途ヲ定メ難キ不便アルノミナラズ 他日當路
 者交代等ノ為メ原價ノ調査ニ移リノ煩累ヲ伴フアリ
 一定し置キタシ
 我曰 然ラバ原價一定ニ就キ貴見ヲ示スナリ
 彼曰 貴説ヲ釋聽シナリ
 我曰 原價一定説ハ貴方ノ主張ナリ先ツ貴説ヲ承
 リタシ次ニ當方ノ主張ニツキ 言セムニ我カ會社ノ決
 算ハ公明アリトシテ政府ノ會計ト異ナラズ此点

南滿洲鐵道株式會社

御安心アレ而シテ將來出立増加に伴ヒ販賣上ノ
 競争多ク生ズル從テ原價ノ安値ヲ要ス然レニ一定
 説ハ原價ノ高低に伴ハシバ會社必ズ苦痛ヲ感ゼサルヲ
 得ス之ニ及シ原價ニ依ル時ハ出立ノ多少ニ應ジ税率
 フ高低スルコトナリテ量ノ石炭ヲ販賣スル時ハ競争
 上價格ヲ付ラセザルベカラズ從テ税率全モ安クシ必
 要アリ之ニ及シテ出立ノ多少ニ應ジ税率高低ナシハ
 原價自ラ高ク税金モ多キコトナリ伸縮自由ニシ
 テ極トヲ妙ナラント思フ如何
 彼曰ク御モ至極ニテ妙案ナリ然レトモ從來ノ理
 算ニ徴スニ一定説ニアラザレバ他ノ種々ノ面倒ヲ惹起

スノ例ナリ次ニ輸入税一トスル其例ヲキモ操縦
 税百ノ一其地ニ例ナシ
 我曰ク其稅稅口原價百ノ一就テ充分ノ根據アリ
 彼曰クカハル付率ノ例ナシ
 我曰ク其例ヲ先ツ貴國現行鑛業法以前ノ
 鑛務章程ニ於テ之ニ準地稅即チ現行鑛產稅百
 ノ一其根底ヲナセリ
 彼曰ク當時此地ニモ其例ナシ
 我曰ク多數ノ例アリ然レモ當時ノ要スルモノ列挙
 ハキヤ如何
 彼曰ク例ナシト思フ異例ノ付率ヲ次ニ他ノ事

前清州鐵道株式會社

數ノ鐵所亦多是ニ做公トスル
我々然ルニ是ヲ其價ヲ降曲スル
千八百九十八年(光緒二十四年)山西河南兩省鐵
山株場ニ關シ山西商務局及河南裕豐公司ト他
方福公司(Peking-Sinobank)ト同ニ議結セ
3レタ合辦礦務章程第六條ニ據テ開辦礦
務每年所有礦產按照去來ノ價值百抽五
爲地稅稅額効中國ニ云々トアリ即チ當時ノ地
稅現今所謂去來稅ノ境口原價ノ百ノ五トセルヲ
看ル可シ
又同條末段ニ據テ以後中國他處有用洋款

4

開採鐵礦應一概仿照此章程將所有礦產價值百抽
五納稅改洋畫ニ云々トアリ即チ此契約成立後
如何處ニ於テモ礦山ニ關シ他國ト契約スルハ其價值百
抽五ニ據ル者ヲ規正シムルモノナリ云々ハ貴國ノ礦
業稅ノ規所ノ礦業法若希以前ニ在リテ價值百抽
五ノ改テ原則トシ之ニ遵テスモノハ寧ロ例外ト爲ル
ハ中モナリ

備考 彼等此契約成立ノ頃ハ其ノ承リテ該地ニ
居ル者ヲ改テ能ク當時ノ事情ヲ知悉セリ
亦ハ其ノ契約ノ其ノ價值百抽五トアレトモ
其ノ實際ニ行ヒタルニテアラス當時又否

二年

巨嶺三付五嶺ノ税金トシテ徴収セシトス
シタリトナルモ行ハレサリキ要メスニ此契
約ハ寧ろ行セラルモ二例ス
林田ノ原價五ノ一ノ根拠ニ付テ所賣同ニ應シ之
ノ税則セシトスニ當リ申合ハ赤色ノ税ヲ持出サレ
ハ甚ガ迷惑ナリ
是ヲ此値百抽五ノ原則カ如何ニ適用セラルヤ
ニ付函ニ例ヲ奉ケテ陳述セシトス
第一例 十九百二十年(光緒二十八年)雲南省七
属鎮務司同ニ英佛合同隆興公司ト同ニ結ビ契
約ナ十四ノ款ニ據リテ公司年報該礦所出各項

5

礦產分別出爐出井均按赤色每百抽五徴収
雲南省作爲工礦地稅云々トアリ即チ出井原價
ノ百分五ヲ以テ税金トセンモノナリ
第二例 十八百九十八年(光緒二十四年)南票炭
坑ニ關スル清英合同契約第七條ニ據リテ清英兩國
政府ニ炭坑口ニ於ケル石炭ノ排泄稅若クハ其價
格ノ百分五上級稅ヲ付拂フ可シリヤリテ即チ坑口價
格ノ百分五ヲ税金トセリ此外熱河道台ニ付拂
フヘキ附金蒙古省長ニ付拂フヘキ附金等ナリ
規程シアレハ是ハ税金トシテ固クハキモノニアラス
第三例 十九百四年六月(光緒三十年四月)

撫烟兩炭坑細則ニ関スル第八回會議錄

(七月十八日全委負出席)

税金問題續キ

彼曰ク貴院ノ百分五税ニ同意スルトシテ前日説述ノ如ク坑口原價ヲ一定ニ置カン

我曰ク前説ノ如ク原價ヲ一定セス毎季實際ノ原價ニ按レ課スル方伸縮自在ニシテ妙ナラム且將來會社ノ示ス原價ニ付キ紛議ヲ生セムコトヲ頗ル憂慮セラル、如クナルモ既述ノ通り會社ノ會計ハ日本政府ノ會計ト毫モ異ナルコトナク公明正大ナルモノナルヲ以テ貴政府ヨリ相當官吏ヲ派遣シ帳簿ヲ檢閲セラル、トキハ此モ疑ノ存スル餘地ナキナリ

四十二年七月二十日記錄二部受

彼曰ク然リ然レトモ貴坑ノ伸縮自在ニシテ出炭額増加ト共ニ納税額ノ嵩ルハ總税金額ヲ指サルニテ噸數トシテハ愈々低下スルナリ、サレハ此際原價ハ可成的高歩ニ一定ニ置キ度ク希望ノ且ツ與方ノ同意ヲ共ニトスル百分五税ノ例トシテ前ニ攀ケラレタル該鑛所ノ多クハ事實休止中ノモノニシテ然ラサルモ税金以外ニ必ス報頂銀ノ一項ヲ含ミ實際頗ル多額ノ納金ヲナシ居ルモノナルヲヤ

我曰ク實際ノ原價ニ拠ルヘシトノ與方ノ主張ハ本条ヲ履行スル上ニ最モ公正ナリト信ジタル誠意ヨリ出タル老婆心ナリ然レトモ飽クマテ一定説ヲ主持セラル、ナラハ全然同意セサルニモアラサルニ彼曰ク貴方ノ誠意ヲ全視スルニアラス從來福公司(北京ニシテゲキト)等ニ於ケル經驗ヨリ將來帳簿檢閲上其他ヨリ来ル紛擾ヲ

慮ナリ

我曰、貴説亦一理アリ然ハ原價一定説ノ方法ニ就キ一言ニ置カン目下
一日ノ出炭貳千貳百噸ヲ超ヘサルモ將來大山、東郷両坑ノ設備成リ此
上益、事業擴張スル曉ハ一万噸位マテハ採掘ニ得ヘキ考ナリ然ルニ今
原價ヲ一定スルニ當リ目下ノ原價ニ按照算定セラルカ如キ一アヲハ断
シテ不可ナリ將來大規模ノ設備成リタル当然ノ原價ヲ豫想シテ協
定シタシ

備考 此時撫順炭坑誌ヲ示シ原價カ漸次低下セル实例ヲ説明セリ

彼曰、吾等ハ飽マテ一定ニ置カムヲ希望ス貴説將來ノ豫想原價ハ
何程ナルヤ

我曰、大山、東郷両坑完備ノ日ハ原價ハ洋銀一元位ニ低下スヘシト考

フ此率ニ按シ一定ニ置キ度ニ貴見如何

彼曰、如此低率ニハ断シテ同意シ難シ吾ニ案アリ同意セラルヤ否即
チ現品(石炭)ヲ以テ百分五ヲ抽スルノ是ナリ本案ハ曾テ北京ニシテ
ト協商ノ際提出シタルコトモアリ

我曰、然ラハ貴政府ハ石炭高ヲ営ムルヤ

彼曰、否奉天ニ於ケル官所自用トスル心組ナリ

我曰、山元ニ於テ現品ヲ引渡シテ可ナリヤ

彼曰、然リ山元貯炭場ニテ受取リテ可ナリ

我曰、運搬ハ如何ニセラルカ

彼曰、貴會社ノ鐵道規則ニ依リ奉天ニ輸送ヲ請フヘシ

我曰、孰考ノ餘地ヲ与ヘラレタシ

彼曰、可ナリ

我曰、我國ノ鑛業法ニテハ石炭ノ鑛産税ハ百分一額ナリ貴國ノ税率ハ頗ル高キニ失セリ

彼曰、貴國ハ斯業保護ノ見地ヨリ此ヲ定メラレタルニテ頗ル結構ナルモ我國ノ國情ヲ見テ

備考 茲ニテ第一条鑛産税ノ論議ヲ終リ第二条ニ移ルトセリ

彼曰、第二条第三項ニ據リテ輸出税ヲ納付スル炭ニ對シテハ前条ノ鑛産税ヲ納付セストアルハ如何ナル理由ナルヤ

我曰、貴國ノ鑛産税ハ頗ル重シ其負担ニ耐ハサルヲ以テナリ

彼曰、契國鑛産税ハ貴國ノソレニ比シ過重ナルハ國情ノ然ノミル所ニシテ致方ナシ現ニ他鑛所ノ如キハ何レモ此負担ヲ爲シ居レリ然レトモ鑛

産税ヲ納ムルカ故ニ輸出税ヲ免除セルノ例ハアラス開平其他何処モ鑛産税一メースノ外輸出税一メースヲ納付シ居ルニアラスヤ鑛産税ハ他ニ如ト例ナキ最低率百分五トシ更ニ輸出炭ニハ之ヲ課セストハ非理ノ極ニアラスヤ

我曰、然リ然レトモ相当理由アルニ於テハ不可ナラサルベシ

彼曰、可ナリ

我曰、我方ニ於テハ人ヲ派シテ各地ノ鑛山ヲ調査セシメタルニ開平ノ如キ鑛出炭ニ鑛産税ヲ課シ居ラス且ツ光緒二十九年時ノ北洋大臣袁世凱ノ訓令中ニモ内地各處ニ搬出スルモノハ銀一錢及厘捐八十四文ヲ納メ輸出スルモノハ単ニ厘捐ノミヲ課シ海關ニ在リテハ出港税一メースヲ課ストアリ即チ輸出炭ニハ海關税ヲ課スルモ輸出税ヲ課セサルヲ此訓令文ノ明

示スル所ニアラスヤ

備考 此時約章書案匯覽乙第十二卷ノ下ニ所載ノ日文ヲ示ス

彼曰ク 貴説信ヲ可ラス如此理ナキ筈ナリ井陘臨城等ハ輸出税三メース
ヲ一メースニ低下スヘシトノ議アリタルモ為メニ出井税ヲ免除スルノ事ナシ
コハ常関(鈔関又ハ旧関)ト新関(海関)トノ關係ヲ言ヒタルモノナルヘシ
我曰ク 信ヲ可ラスト称セラルモ開港井陘臨城等ニ於ケル裏面ハ事實
頗ル曖昧ニシテ甚シキハ公表出炭高即チ課税出炭高ナルモノアリテ仮
令ハ五百噸ノ出炭ヲ三百噸ト偽リ二百噸ニ對シテハ常ニ課税ヲ免レソ、
アルノ実況ナリ彼何々公司ト云ハ合弁経営ノ内情比々皆然ラサルハ
ナキナリ

彼曰ク 貴会社ノ内情亦吾等之ヲ知ルニ由ナシ

我曰ク 開平炭坑協約書ヲ拜見シタル如何

彼曰ク 如何ナル協約書ナルヤ

我曰ク 章程ナリ

彼曰ク ナシ

我曰ク 無キ筈ナレト思フ

彼曰ク 有ルニ相違ナカランモ承知シ居ラス

我曰ク 取寄セラレタシ

彼曰ク 何処ヨリ取寄スルニヤ

我曰ク 開平鑛務局スハ北洋大臣ノ元ニアルヘシ

彼曰ク 有ヤ無キヤ不明ナリ同ク所ニ依レハ同鑛務局章程ハ英國人
ヲ任意作製セシモノナル由ナルモ秘密ニ付セラレ居レリ古キモノナラハ

アルナラン

我曰ク 古キモノニテモ可ナリ拜見シタレ

彼曰ク 古キモノハ参考ノ値ナシ章程ニ税金ニ關スル事項ナシ

我曰ク 兎モ角拝見致シタレ

彼曰ク 古キモノハ

我曰ク 新田トモ澤調査ヲ清フ

彼曰ク 恐ラク妄カラム

我曰ク 何等ノ章程ナクシテ如何ニ業務ヲ執行スルヤ

備考 彼黙ス

我曰ク 吾等ノ調査ニ依リハ開平炭坑ハ一ヶ年五万両ヲ税金トシテ支度
政府ニ納付スルハ非一切ノ課税ナキモノ、如シ

彼曰ク 否、如此コトハ断シテアラス

我曰ク 調査ノ結果事實相違ナシ

彼曰ク 何シニシテモ本条第三項ハ全然新例ナリ、若シ開平ノ例ニ倣ハレ
ト欲セシルハナラハ全坑課税ノ全体ヲ持順炭ニ適用スル方如何

我曰ク 最惠率ニ擬ルハキコトハ協約ニ於テ既定ノ事項ナリ他ニ輸出炭
ニ鑛産税ヲ課セサル例アラハ是ニ依ル敢テ不可ナキニアラスヤ

彼曰ク 事實如此鑛所ナシ

我曰ク トモカク本項ハ明日マテ延期シ第一項ヨリ協定シタレ

彼曰ク 可ナリ

備考 相互加筆對照

彼曰ク 加筆ノ事項(昨年滿洲ニ關スル北京協約成立当日即チ九月四日

以後輸出税ヲ一メーストスルヲ昨日總督ニ伺ヒタル結果同意ニ難
シ露國ニモ同様ノ例アリ他ニ条件ヲ附セラル、ナレハ協定ニ應スヘシ

我曰ク如何ナル条件ナルヤ

彼曰ク鑛産税ヲ日本軍將順占領採掘開始ニ遡リ納付セラル
タシ

我曰ク鑛産税ハ今ヨリ協定セムトスルモノニシテ其額未タ決セサルナ
リ往時ニ遡リ得ヘキ理一モナシ然ルニ輸出税ハ滿洲協約締結ノ當時
既ニ最惠一メースナルコト確定セルモノナリ是ヲ協約締結ノ時ヨリスル
ハ何等不可ナキナリ

彼曰ク最惠率トアルモ一メースニスルノ定メナシ

我曰ク最惠率ノ一メースナルコトハ當時既明ナリシニ非スヤ

彼曰ク當時一メーストノ定ナレ後ニ一メーストセルモ何時ヨリ納付スヘシトノ
規定ナキニ非スヤ

我曰ク輸出税ハ該協約締結以前ヨリ納付シ居レルモノヲ同協約ニ依
リ一メーストナシタルナリ

彼曰ク何程納付シ居ラルヤ

我曰ク三メースナリ即チ協約締結以後一メーストスヘキナリ

彼曰ク然ラハ鑛産税モ占領當時ニ遡リ納付スヘキニ非スヤ

我曰ク鑛産税ハ只今ヨリ協定スヘキモノニシテ當時一定シ居タルニ非ル也
彼曰ク協定シタル上遡リ課スルナリ

我曰ク貴下等ハ鑛産輸出西税ヲ一体トシテ論セラル、カ如キモ本件
素ト個々ニ議スヘキナリ

彼曰ク然リ個々ニ論スヘシ即チ輸出税ハ一メーストレ協約締結當時ニ
漸リ鑛産税ハ協定ノ上貴國採掘開始以來ノ総数ニ課スル方最モ
公平ナラン然ラサレハ一方ニ厚ク一方ニ薄キ感ナキヤ

我曰ク協約第三款ヲ如此解釈セハ我カ締約当局ハ頗ル意外ニ感
スヘシ

彼曰ク輸出鑛産両税共ニ最惠率トアルニ非スヤ等シク協定スヘ
キナリ

我曰ク一ハ既定ニシテ他ハ未定ナリ

彼曰ク既定ト云ハルハモ最惠トアルノミニテ一メースト規定セラレム故ニ
鑛産税ノ提議レテ定ムヘキモノニアラスヤ

我曰ク貴説ノ如クニハ依然一体ニ論セラルニ非スヤ

彼曰ク協約第三款(乙)項中ノ應納各項ハ如何ニ解セラルヤ

我曰ク日本文ニハ「」ニ当ル文字ナレ

備考 日清両協約書對照

我曰ク(乙)項即チ鑛産税ハ協定スヘシトアルモ(丙)項ハ単ニ最惠率
ニ依ルヘシトアリ

彼曰ク細則協定以前ニ溯ルノ字義ナレ

我曰ク本項締結ノ日本政府ノ意向ハ當時三メースノ高率輸出税ヲ
納付レワアル負擔ヲ脱セム為メ特ニ定メタルモノナリ

彼曰ク當時ニ溯ルノ字義ナレ

我曰ク鑛産税ハ該協約ニ於テ日本カ始メテ仕拂フノ承諾ヲ與ヘ
タルニテ輸出税ハ従前納付シ来リタルモノヲ該協約當時ヨリ一メース

ト額ヲ定メタルナリ貴説ト大ニ其意ヲ異ニス

彼曰ク 一理アルモ別ニ溯ルトノ字義ナクシテ協約締結當時ニ溯ルトキハ
鑛産税モ亦溯ルノ不可ナキニアラスヤ

我曰ク 何時ニ溯ラル、意ナルヤ

彼曰ク 鑛産税ハ貴國ハ採掘開始當時ニ溯ルナリ

我曰ク 協定第三款ノ「協定スヘシ」ト承認ストノ字義ハ法律上如何
ニ解セラルヤ

彼曰ク 協定ハ税額ノ協定ニシテ協定以前ニ溯ルハキ意ナレト解セリ
我曰ク 貴説ノ如クナラムニハ其主張懸隔甚シク協定ノ餘地ナシト認
ム

彼曰ク 然ラハ貴見如何

我曰ク 協定スヘキハ鑛産税ナシヲ云ヘルナリ其意同ハシテ明ナラスヤ

彼曰ク 昨年滿洲協約締結以來今日マテノ輸出総額何程ナルヤ

我曰ク 明瞭ナラサルモ金額ハ左程多カラサルハク會社會計上ヨリ
云ヘハ大問題ニ非ルモ主義ニ於テ飽クマテ主張スルナリ総額ハ電報ニテ
本社ニ問合せヘシ

彼曰ク 協約締結當時ニ溯リ一メーストスルヲ同意スルト同時ニ鑛産
税ハ貴國人採掘開始當時ニ溯リ納付セラルシ

我曰ク 貴方ニ都合ヨキ事提議ナルモ日本政府ノ所謂採掘税ノ納
付ヲ承認ストハ如此意ニアラサルナリ若シ該協約ナカリセハ日本ハ
戦勝國ノ權利トシテ当然何時マテモ条約ノマテ採掘スヘキ考ナリ
ナリ

彼曰ク 然ラハ貴意ハ何時ヨリテ納税セラル、考ニヤ貴國人採掘開始當時ヨリカ昨年滿洲協約締結當時ヨリカ將々本細則協定後ヨリカ

我曰ク 鑛産税ハ本細則協定後ヨリ輸出税ハ昨年滿洲協約締結當時ヨリ

彼曰ク 不同意ナリ露國カ第ト合同採掘後モ各種ノ税金ハ之ヲ納付セリ貴國繼承後ト云モ引續キ当然納ムヘキナリ

我曰ク 貴説信ニ難シ露國ハ當時採掘セシ石炭代金ヲモ支拂ハサリトノ事實アルニ非スヤ王承亮ニ就テ事實ヲ同ナルヘシ

彼曰ク ソハ戦後ノ為ナリ従前ハ如此コトアラサリシナリ

我曰ク 本案件ハ根本義ニ於テ他ノ合同採掘ノ鑛石ト趣アリ是ニシテ

國カ戦勝ノ結果獲得シタルモノニシテ昨年協約ニ依リ始メテ納税ヲ肯ニスルノトナリタルナリ

彼曰ク 兎モ角既ニ承認スレタル上ハ何時ヨリ納付スヘシトノ日限ナキヲ以テ溯リテ可ナラスヤ

我曰ク 終リニ再言スヘキハ會社ハ通商条約ニ依リ輸出税一メロストスヘキ權ヲ有スルモ貴國税関ニ異議アリタル為メアンダープロテストノ下ニ依リニメロストヲ納付シテアリ昨年九月四日以前ノ納税ハ今ハ主張セザルニ付日以後ハ協定ヲ待タス一メロストスヘキヤリ金額ニ於テ左程ノ大問題ニハ非ルモ主義ニ於テ絶対ニ貴説ヲ賛成スル能ハス

撫烟兩炭坑佃則ニ于ル第九回會議録

(七月十九日全委員出席)

税金問題、續キ

我曰リ昨日熟考ノ上田答スハ約シタル鑛産税百分五ヲ現品(石炭)ヲ以テ納付スベシトノ貴案ハ他鑛所ニ具例ヲ見ズ且仮ニ一日出炭高ヲ五千噸トシハ二百五十噸一万噸トセバ五百噸ヲ納付スルコトナリ此等多量ノ石炭ハ奉天ニ現ハレモトク税金トシテ徴シタルモノナレバ官衙消費ノ残余ハ低廉ナル價格ヲ以テ賣出スル市場ノ攪乱スルキ慮モアリ熟考ノ結果同意シ能ハス

彼曰リ本案提出ノ理由ハ原價一定說實行ノ方法ト

四十三年十二月二十日記録一節 有明州鐵道株式會社

シテ最モ公正ト信ヅタルヲ以テナリ他ニ原價一定ノ適當ナル方法ダンアラバ敢テ主張ノ限リニアラザルナリ尚ホ市場攪乱云々ニ就テハ相當條件ヲ付セラルバシ

我曰ク当方ノ希望トシテハ依然昨日未倭述セル毎季結算ノ實際ニ按ヅタル原價ヲ以テ定ムルヲ伸縮自在ノ妙案ト信ズ若シ一歩ヲ譲リテ一定説ニ賛成スルトセハ將來大山、東郷、西坑設備成リ現時ニ數倍セル出炭アル時ノ價格ヲ豫想シテ定ムルハ断ジテ目下ノ情況ニ依レ可ラズ

彼曰ク其時ノ豫想價格ハ何程ナルヤ

我曰ク奉天銀一元位ナラム見ナラハ一定説ニ同意スミ

彼曰ク頗ル低率ナリ如此例ハ他礦所ニ見サル処ナリ

我曰ク他礦所ニ見サルモ撫順炭坑ハ將來之ヲ突クナリ

彼曰ク弊業現品納付ノ例ナキト共ニ貴説ノ噸價洋銀一元ナルモノモ他ニ例ヲ求ム可ラズ將來ノ出炭高ニ就テモ貴國經營必ス功ヲ奏スヤキモ一面販賣上ノ制限モアリ俄ニ断ス可ラス近ク例ヲ開キ炭坑ニ見ルニ經營三十二年北清唯一ノ大炭坑ト目セラルニ係ラス今尚ホ二千餘噸ニ過キ不然カモ炭量頗ル豊富一切ノ設備亦完成セルモ販賣上ノ意ノ如クナラズ遂ニ制限ヲ餘裁ナクセラレワアルナリト

我曰、故に實際ノ原價ニ據ルベシト聲言ハ貴院ノ
 杞憂モアリ隨時帳簿ヲ記シ會社ノ誠意ヲ識シ
 ルニ於テハ双方トモ頗ル便ナルベシト信ズルナリ貴業一
 院ノ原價洋銀一エトルニ不同意ナリムニ仲備自在
 ナルハ實際ノ原價ニ依ルコトシテ決定シタリ
 尚ホ引例セラルル開手炭坑ハ前年度ノ報告ニ依ル
 モ一月平均四五千噸ヲ販賣セリ
 彼曰、開手炭坑ハ人ヲ派シ調査シタルニ事實出
 炭二十餘噸ニ過キズ
 我曰、近時瀋州炭ノ競争モアリ其炭量ニ於テ標
 價ト比較シ得ルモノニアラズ

彼曰、要ハ原價シ一定スルニアリ開手ノ例ニ依ル礦
 産税噸銀一メースナリ
 我曰、然レハ原價ハ何程ニ一定セラルシキ希望ナルヤ
 彼曰、金一円以上ナリ
 我曰、現時ハ於テスラ一円ニ三十メース出デス將來出炭
 増加ノ曉ハ原價益々低率トナルヤ明カナリ洋銀一
 元以上ハ同意シカタク
 彼曰、然レバ公平ナル現品納付税ニ賛成セラルタン
 我曰、本社ノ意向ヲモ聞キ合セ十分熟考シタルモ不
 可ナリ同意出来ズ
 彼曰、最も公平ナリト信スル弊院ニ同意ナキハ遺憾

ナリ然レ原價洋銀一元一匁説ハ低率ニシテ斷
テ應ジ難シ

我曰ク洋銀一元説ハ決シテ低率ニアルハ將來一切ノ
設備成ルノ日ハ更ニ低下スベキナリ貴下等ノ金一匁以
上トハ何程ナルヤ

彼曰ク二匁モ一匁以上ナリ三匁モ一匁以上ナリ

我曰ク撫順炭坑ハ貴國ニ於ケル外國人合同ノ他礦
所ト規模ニ於テ大ナル相違アルノミナリ井陘臨城如
キハ專ラ内地賣炭ヲ主トセルニ及シ我ハ主トシテ輸出ニ
力ヲ致サル可シ故ニ從テ礦産税ノ外輸出税一メース課
セラルル輸入口ニ於テ子口半税ヲ課セラルル恰モ採炭ナリ市

場ニ至ルマデ三重ノ錢條個々越ハサル可ラサルナリ撫順炭
坑ノ此地也鑑ニ礦産税ニ於テ餘リニ慘酷ナラサルヲ
希シ況ンヤ輸出子口兩税ノ如キハ文明國ニ見ル
可ラサルモノナレニ於テフヤ

彼曰ク關稅ノコトハ國情ノ然ラント所亦止ムヲ得ルナリ
礦産税原價一定ハ先例ニ依リタレ金一匁以上ト云フ
モ二匁三匁ト云フカ如キ不當ノ要求ニアラサルナリ

我曰ク一匁五錢ヲ一匁拾錢ヲ言明セシメシ

彼曰ク双方ノ主張ニ非常ノ差アルニアラサレバ今後懷
寧容易ナル事ナレハ本案ハ未決ノ俟他ノ問題ニ移
リテハ如何

我曰、主張接近シタル引換ヲ進行決定シテハ如何
 彼曰、日本金、一月三十先ニモ、總督ハ承認セラルヤ
 否不明ナリ、總督ハ切リ現物納税ニ主張シ居ルナリ
 我曰、如此ハ非常ノ差ナリ
 彼曰、然ラハ貴見如何
 我曰、前年來迄、洋銀一元記ハ数字ニ據リ最
 モ公平ナルモノナリ
 彼曰、貴記ノ原價洋銀一元ハ、幣方ノ同意シ能ハサ
 ル所、幣記現品納付ハ、貴方ノ賛成ヲ得ストモ
 ハ他ニ何等カ妙法ナキヤ
 我曰、實際ノ原價ニ依ルヤキ、原案ノ外ナシ

彼曰、原價一定説、最小限ヲ讓ラレタシ
 我曰、最小限ナリ洋銀一元ハ、決リ百分ノ五額以下
 ナラザルナリ目下一噸ノ採掘費洋銀五十五仙内外ナ
 ルヲ以テ東郷、大山兩坑完成ノ曉ニ於テ五十銭ト假
 定シ外ニ諸掛費ヲ五十銭ト計上シタルナリ
 彼曰、夫ハ大体ナラム
 我曰、然リ時ニ多少ノ差ハアルヤモ計ラレズ
 彼曰、信島何程讓ラルヤ
 我曰、讓歩ノ餘地ナキモ出炭増加ノ関スル貴方ノ
 疑問ヲ解カレ、為メ出炭五千噸以下ノ時ハ金一円
 五五千噸以上ノ時ハ洋銀一元トスベシ

彼曰、此ノ條件亦頗ル煩累ニシテ特例ナリ
我曰、然ラハ條件ナキ洋銀一元凡煩累ナラシテ
可ナラズヤ條件ハ將來、出炭、関心貴方ノ疑問
ヲ解カムカ為メナリ

彼曰、敢テ疑フニテラズ將來ノ煩雜ヲ慮レルナリ
我曰、コハ極度ノ讓歩ナリ同意ヲ希望ス井陘
臨城炭坑ノ如キ内地賣炭シ主トセルモノナラハ一元
ニ元ニミテモ負担スヘキモ我ハ他ニ輸出子口等ノ
重税ヲ負担セサル可ラサル義務アリコレ以上ハ到底不可ナリ
彼曰、井陘臨城ノ諸炭亦漸次輸出ノ計畫
中ニアリ鬼モ用現品納付説ニ同意セラサルニ於テハ

井陘炭坑ノ例ニ依ラレタレ

我曰、井陘ハ何程ナルヤ

彼曰、庫平海關銀一兩ナリ夫レ以下ニテハ他礦所亦
之ニ倣テ要求アルノ煩累ニ堪ハズ

我曰、若シ他礦所之ニ倣ハトスルノ慮アリハ本細則
順定ハ之ヲ秘密ニ付シテハ如何ニヤ殊ニ撫順炭坑ハ他
ノ所謂合同礦所ト異趣ノ異ニスレハ

彼曰、合同、礦所ハ我國ノ資本加入シアルヲ以テ却テ
保護スルノ必要アルモ接順ノ如キ外國独占ノモノハヨリ以
上加重スヘキ性質ノモノナラサルカ且リ秘密ノ保持ハ困
難ナラム

我曰ク、互ニ秘スルニ於テ毫モ困難ヲ見カ現ニ開平炭坑ノ如キ昨日来再三其章程ノ拝見ヲ希望シタルモ不明ナリト称セラル、ニアラスヤ

彼曰ク、開平炭坑ニハ新章程ナシ

我曰ク、然ラハ貴國鑛山契約中秘密ニ付セシレ居ルモノ一モナキヤ

彼曰ク、無シト信ス

我曰ク、絶對ニ無キヤ

彼曰ク、無シト思フナリ

我曰ク、例ヲ示ス、レ

彼曰ク、既ニ貴下等ノ知ラル所ノモノハ秘密ニアラザルナリ

我曰ク、然ラハ出炭ノ多シヲ論セス原價シ一兩トセラル、意ニヤ

我曰ク、秘密トハ公表セサルモノヲ云ヒ公表ト秘密ノ異ナルハ秘密ノモノニ対シテハ之ヲ知ルト虽モ他鑛所カ以テ例ト

ナス能ハサルニアリ強テ秘密ヲ主張スルニアラザルモ他鑛所ノ均

而皆テ慮ル云々、言アリタルヨリ税金ノ事項ノミテモ公文ヲ彼

我ノ間、交換シ置ク位ニテ公表セサル方如何ト思意セル迄ナリ

彼曰ク、貴院拜義セリ鬼モ角一兩説ニ対スル貴見如何尤モ本説トテ總督ニ於テ義認セラル、ヤ否明確

ナラザルモ

我曰ク、然ラハ出炭ノ多シヲ論セス原價シ一兩トセラル、意ニヤ

彼曰、然り

我曰、然らば金、一円三四十枚、相当スヤ、按、炭坑ノ如キ大炭坑ト僅々出炭ニ三百噸ヲ出デザルハ炭坑ト同一視スルハ不公平ナリヤ

彼曰、否、一日出炭五千噸ト見積ルモ一年十萬兩内外ニ過キズ

我曰、頗ル過重ナルカ上他ニ輸出、子口兩税ノ負担アリ到底同意シガリシ

彼曰、貴會社ハ非常ノ利益ヲ擧ゲラレワ、アル由ナレバ決シテ過重ノ負担ニアラズ

我曰、決シテ左程ノ收益アルニアラズ、今日迄ノ計算

ニ依リハ投入シタル資本ニ対シテ毎半年期百兩、二乃至四倍ノ金利歩合ニ當ルニ過ギス

備考 帳簿ヲ示ス

彼曰、貴會社收利ノ實際ハ内外新陳ニ依リ之ヲ求メルニ貴會社ノ所謂存價ト云フ市場ニ於ケル撫順炭價ト對比シハ明ナリヤ

我曰、撫順炭ノ市場ハ一季天ニアラス、遠、上港、香港、新嘉坡等ノ主トシ、他地方ニ於テハ以外數多、他炭ト競争セザルバカランナリ

彼曰、貴會社ハ遠、上港、香港、新嘉坡等ノ市場ニ於テ頗ル低價ヲ以テ販賣シ炭坑所在地トシテ密接ノ

百済洲金通杉三會所

上略トアリ毎噸鑛産税一ノーストをハ十一
 万四千兩、出井税ハナルヘキヲ設キ即チ反
 面輸去炭、鑛産税ノ課シ居ルリル証據ト
 して説明ス

彼曰ク 輸去炭、税ハ推算ナラム

我曰ク 然リ

彼曰ク 四五万兩ハ正確ナラカシモ當方ノ調査ニ依リハ
 全炭坑ノ報効銀毎年五万兩、鑛産税一ノースト内地
 鈔税税一ノーストを五厘、輸去税一ノースト乃至重箱ハ十四
 文ヲ納付ス

備考 鑛務局、照會を電報ヲ示ス

我曰ク 貴隆ノ情況ハ大ニ然ラズ今炭ノ輸去ハ直接天皇
 島ヨリ決シテ鑛産税ノ課シ居ル

彼曰ク リンコトナシ故キ方ノ税金ニシテハ正確ナリ

我曰ク 提シタル証據ハ貴國官衙ノ公文ナリ

彼曰ク 四五万兩トハ大体ヲ謂フナルヘシ

我曰ク 公文ニ偽リナキヲ答ナラム

備考 然ラズ

我曰ク 次、昨々調査ヲ行フ約セシ本條第一項ハ整事ノ
 昨々滿洲州船約締結ノ時、溯テ輸去税一ノーストナシ
 然レテ昨々九月四日、本年六月ヨリ、輸去炭ノ開
 金トシテ輸去總高ニテ六萬六千二百九十七噸、コレハ

百済洲金通杉三會所

輸去税十二萬五千二百五十四圓に於て此ノ三分ノ一
 區附ヲ受ヌル譯トナシナリ
 彼曰 約ハ萬國程ナリ
 我曰 然リ
 彼曰 本件ハ大体ノ根柢終ニ後ニモウシタシ
 我曰 可ナリ次ニ第ニ乗第ニ項陸路韓國ニ出ツルモノ
 就ニ所定ノ如ク可ナリ如何
 彼曰 中 俄陸路通商章程ニニテトアリヤ
 我曰 然リ
 彼曰 何年頃ノ章程ナレヤ
 我曰 一八五九年同法也年ナリ佛國其他トモ同ノ章

程アリ
 備考、中俄陸路通商條約ノモ
 役曰 可ナリ目下本件ノ関ニ稅務司ノ関合セ中ナシハ同義
 又ハ通商條約ニモウシタシ
 我曰 可ナリ
 税金納期ノコト
 我曰 第ニ乗ノ税金納期ニ就ニ可ナリ如何
 彼曰 弊國鐵道法ニ鐵道稅ノ月額分ク納付ス
 コトナリ居ル此例ニ依リタシ
 我曰 何レノ方法トモ敢テ主張セバ唯ハ會社ノ事業



下し候へ置キ之、九月、兩季り々々致し者カト恩フミ
 彼月 毎月納付スルモノモツメシ
 我月 輸出税ノ方々如何
 彼月 海關ノコトナレバ不明ナリ現時々如何モツルヤ
 我月 明ナリカモ月納ナリヤ
 彼月 聞合モナレバ致シヤ
 我月 可ナリナリ東ノ海ニ出入スル船舶自任ノ消費
 炭ノ輸出税免除如何
 彼月 承認出キス削減ノ額モツメシ
 我月 相當理由アリテ之を案セシテ御承認ノ希望ス
 彼月 理由ヲ押込ニタレ

我月 第一船舶自任ノ消費炭ノ輸出、アツカント明シテ輸出
 輸去ニ伴フ輸入地ナル所ニナルト常識マツリテ判、得ヤレ
 即チ港口、於ケル船中、食料品ヲ賣ルトモ糧ナリ
 彼月 價格ノ多額、上ンモノモ然ルヤ
 我月 然ノ商品トシテ輸出スル、アツカ限、可ナリ然レ
 大連、租借地、輸出税ヲ課スル所ナリ
 我月 大連海口、於テ供給スル船用炭、輸出税ヲ課
 スル理由ナレ何トナレハ同地ハ清國法權ノ行ハカ
 所ナレハナリ
 我月 大連海關及内地汽船航行ノ關ニ係ル書、第
 二條ニ清國ノ商品又ハ產物トシテ大連ニ他ノ地ニ積

ラントナリ、現行條約より輸出税ヲ納ムルコトナリ居ル
船用炭、他ノ處ニ向ルル爲メ船積ムルモノアリサレハ課
税スルヲ得カルナリ

彼曰 第一ト事ニハ一理由アリヌヤ

我曰 事ニハ條約ニ依リ所定セシモノナリ

彼曰 税ヲ納ムル他ノ非港埠ニ此例アリヌヤ

我曰 然レハ沿岸ニ依リ課税居ル

彼曰 明文アリヤ

我曰 然リ

彼曰 明文アリバコト所定ノ必要ナリ明文ニ依リテ定
ルコトアリヌヤ

我曰 他ノ開港地ニ實例ナキヲ以テナリ

彼曰 實例無クハ不可ナリ却テ希望ス

我曰 不承認ノ理由如何

彼曰 長江沿岸ノ例ニ之ヲ開港地ニ適用ス可クハ當

然他ノ開港地ニ實例ニ倣フベキナリ

我曰 長江沿岸ニ於テハ最惠ニ均等セムトモナリ

彼曰 他ノ實例ナリ特ニ撫順ノ爲メ國情ヲ改メ可クハ

貴後ノ輸入地ノ有無ハ我國法ニ於テハ關セカニナリ

我曰 甚ハ不得要領ノ説ナリト思フ

(七月二十日全委負出席)

我曰ク
兎^三南北
總稅務使
一問合
サレタシ

我曰ク 序ニ
イノル、石炭が東清鐵道ニ依リテマシ

ユリヤ
以西
三
ルトキ
課税
セズト
得ク
真ナルヤ

四十二年十二月二十日記錄 二部
有南州鐵道株式會社

彼曰ク「タライール」ハ「コンジュヤ」ヨリ城里位隔ル處ニヤ
我曰ク其里程ハ知らズ東清鐵道ハ此石炭ヲ使用セリトマ
彼曰ク此ハキ「公文」ニヤハ知ラズ「ルビン」ハ稅務使ニ同合
ムコトニスベシ

我曰ク今日第五條ヲ議セシ

彼曰ク第五條ノ理由ヲ陳ヘヨトシ

我曰ク清國官衙ニ使用スル石炭ヲ每稅トスル理由ハ官衙自身
使用スルモノ稅ヲ課スル之ヲ右ヨリ出シテ左ニ納ム事トナリ每意義ニ
歸ス故ナリ之ヲ免稅トシ出井稅多ク安ク石炭ヲ求ムル如クヤ

彼曰ク會社ノ自由炭ノ方ニ如何

我曰ク會社ハ納稅ノ主体ナリ石炭ハ客體ナリ會社ハ石炭ヲ

採掘スル者ナリ炭ヲ使用シ之ヲ販賣セヨカ爲メ石炭ヲ運搬ス
故ニ會社自身ノ使用スルモノニ課稅ヲ爲サズ石炭カ外間ニ賣出サ
ルニ至リ始メ納稅ノ義務ヲ負フキモノナリ實例ヲ尋クハ開平石炭
坑ノ如キハ年額十萬噸以内稅坑所消費炭十三萬噸炭
製造用五萬噸ニ對シ課稅セザルニアラズヤ

彼曰ク爾其消費額現在ノ「ヤ」

我曰ク昨年ノ消費高ナリ

彼曰ク毎年同額ナリヤ

我曰ク「同」ガ「サル」バ「レ」思フ

彼曰ク其他ノ理由ナキヤ

我曰ク他ニシテ但シ合同契約ニ此等石炭ヲ每稅トスルノ例アリト

思フ

彼曰ク 然る存件ノ當方ノ意見ヲ陳フベシ第五條清國官衙需用炭稅ヲ課セラルトナリマシキハ不當方議諦アリオ其官衙ノ程度ヲ知ル者ハ網官衙門ニ地方官衙ニアルハ勿論或ハ電燈局ノ如キ人民ノ資本ヲ合シ居ルモノ或ハ意味ニ於テ官衙ト云フ可ク或ハ官衙ヲ補助ヲ與ヘスモノハ一々免稅セラルカ此官衙ニ絶ハ実ニ漠トシ其範圍ヲ定メ難シ

第三 會社自用炭ヲ無稅トスハ井陘臨城等如クノ軍ニ炭ヲ出スモ限ルモノナリ而シテ南滿會社ハ鐵道ヲ有シ電燈瓦敷等事業ヲ營ミ以テ此等鐵道ノ使用ハ實ニ莫大ニキキ益將來會社ノ企業勃興シ各地電氣瓦敷等ヲ起スベキハ益

其額ヲ増加シ殆んど礦產稅ヲ納ムベキ餘額ナキニ至ラン

我曰ク 否、礦產稅ヲ納ムカニル筆遣ヒナシ

備考 統計表ヲ示シ會社需用炭ハ出炭ニ比シ僅々タルヲ云フ

彼曰ク 表中社用トハ何ナリヤ

我曰ク 會社全炭ヲ指ス

彼曰ク 社負トハ

我曰ク 之ハ課稅サルベシ

彼曰ク 社内區域ハ如何

我曰ク 會社全件ナリ即チ南滿會社ニ干係スモノハ何モ

モ合ム

彼曰ク 自用炭并將來タル煩累ヲ避クル為ニ會社自

二 可謂州鐵道會社ノ實情

用炭制限ヲ付す此何

我々 交渉便言にモ一應尤モ一条件ヲ附シ制限ラマ
ハ可

彼等 自用炭制限設ル極多の當ナルコト、思フ即チ將來
新電氣事業如キ無限ニ蔓延シ来ラ方足等、全ク免稅
毎稅炭無限ナラ

我々 然ルモ事實ヲ考ヘテ

彼等 制限ラサル區域ヲ以テ、將來需要ノ變動主セ故ニ
域トモ噸數ヲ限

我々 宜シサレ足ハ在ニ限議

彼等 官衙方、在ニ企業起ラ何程ニモ割ラセラルカ

我々 然リ我々ニ多ク、毎稅炭アル夫レ文々賣價ヲ割リ、
賣ス我レニ收支ノ損得ナ

彼等 會社自用炭及清国官衙需用炭云々アル、如何ニモ
様ニ便宜甚タ多ク、我々、地吸炭ヲ使用スルセザルト、我々、
書キ、必モ地吸炭ヲ使用セ、他ニ數多ノ石炭坑アリ、故ニ我々
、礦產稅ヲ得、且、徒ラ清国官衙需用炭云々、文字アル、我
方取テ便ル處ナ

我々 茅五條ニ付テ、更ニ噸數ニ付具體的案ヲ作リ提
セ

又曰ク茅六條ニ付テ、議論ナカ

彼等 茅六條ニ付、程度ヲ考ヘ、ト云フニ付異議アリ

我曰ク 此條は全部積立ありし既ニ額定税ヲ得せしより更ニ税額をノミナシ保蓄アリタリ

彼曰ク 此條ニ租税ト凡モ清國ニ租税ト別箇モノナリ安國ハ如何

我曰ク 我國ニ同一意味ナリ

彼曰ク 此租ト例令ニ借家ニ家賃をスル租金ナリ土地ヲ所有スル地租ニ地價ノ騰貴ハ此租ヲ納メサリモ之ニ納付セラルベキモノナリ

我曰ク 租金熟シ地租ナリナリ

彼曰ク 我カ云フ租ト置方買収民地租ヲ納メラレタリ是レハ從來人民ヨリ納メリタリ炭坑ニ買収セラル後納租セシムル故

5

國庫ニコレヲ收メラハ漏元誤リ清國民タル炭坑トナシ不此租金ヲ納ムル義務アリ

我曰ク 議席甚ク激甚ス我カ云フ置方買収民地内炭坑用地ハナク大部分ハ鐵道用地ナリ此鐵道用地ニテ納税セトムルカ否ハ議論複雑主ク貴會ヲ解ニセヨ

彼曰ク 清國內ニ於テ鐵道ヲ築セリ東清南滿ハ地ナリ或ハ借款ヲ用テ敷設セラル或ハ清國自ラ敷設セラル而シテ東清南滿ハ土地ニ課税セラル炭坑ノ為メニ加算設セシムル幹線ト同視スル能ハズ租金ヲ額トシ國庫ノ收入ニ關スルナリ若シ之ヲ免除スルハ一旦上裁ヲ仰カセバ同義ナリ能ハズ貴方ニ於テ其税額ニ異ニテ額ニテスヤ

我々 其總額如何程位ナヤ

彼等 奉天省の清國支那地方の地方ヨリも税率非常ニ低
シ美税ト云フ程ニシテ

我々 長春地方の如何ナリヤ

彼等 長春の鐵道幹線ナリ、極便線ニ出炭ノ為メ敷タルモ
其他の幹線ト同一現スベカラ

我々 一畝何程ナリヤ

彼等 一畝拾錢ニ至ラト云フ

我々 租額ノ少額ナリ故ニ定メテ「ニ」ガテ「取」テ「及」ナ
シテ「及」ニ「主」義ニ同意ス能ク「即」承知「通」リ「極」便線ト「異」ナ
今「多」收「率」矣「以」前「免」モ「角」目「下」「案」定「通」行「用」ト「シ

モ「必」當「線」ナリ「時」業「益」ニ「乘」恩「ヲ」増「サ」セ「故」ニ「官」口「支」線「ト」異「ナ」ル「ナ」レ

彼等 貴方買収地ノ元所有ニ「現」上「官」ヲ「納」税「ヲ」通「シ

上「地」ヲ「既」然「坑」ニ「賣」却「セ」リ「テ」人「民」ヨリ「交」納「税」ニ「新」ヘ「出」タル「モ」ナリ

我々 鐵道用地ノ免租ト「畢」ニ「炭」坑「用」地「ニ」ハ「納」税「モ」ト「シ

ヤ「ナ」ル「一」應「本」社「ト」帳「簿」ス「ベ」レ

彼等 兎モ「角」一應「本」社「ト」打「合」セ「ラ」ル

我々 御考「考」ス「為」メ「後」来「ス」ル「情」ヲ「決」ヘ「シ」テ「事」業「ニ」進「出」

買「収」シ「地」代「ナ」ル「ハ」以「來」ノ「地」代「ナ」ル「ハ」以「來」ノ「地」上「地」云「倉」庫

ヲ「建」テ「極」便「鐵」道「ヲ」敷「設」ス「等」擧「土」ヨリ「起」リ「故」ニ「東」清「鐵

道」ニ「テ」附「屬」地「ト」ス「ベ」キ「ナ」リ「勿」論「ナ」リ「ハ」ハ「會」社「解」決「ス」ル「業

土「地」民「主」義「坑」ニ「行」ハ「率」ヨリ「以」テ「土」地「百」十「分」餘「地」ヲ「賣」收「シ

多前車通り既露國經營當時鐵道附屬地見做せり我
方於テ之ヲ鐵道附屬地ト見做スモ是友ト見做ス
彼等却親ニ親キ者ト見做スル様ニ炭坑附屬地ト見做シテ
他ノ支線ト同ク現ス能ハサルナリ
我等、蘇蒙の如ク古傳ニ主權露國が買収ス土地ヲモ納租セ
ト云ハルナリ理由略ナリ炭坑附屬地ト見做スル様ニ
於テ主權一ツト其意ヲ解スルニ於テ我方ハ金銀ニナキ
多量ニ金銀ト雖モ主權ニ於テ爭フモノナリ
彼等、我方ノ希望ヲ云ヘハ蘇蒙の如ク全線ニ納租ヲ款スルモ
是レ以後東免租ト来リモ社會主義者チヤンギ故ニ炭坑が買収
ト見做ス限リ納租セシムヲ望ムナリ將來モ市線路ヲ延長セシム

7

「アラスカ」露國鐵道用地チトテ納租ヲ拒マルニ至リ大ニ我國庫
收メニ關係スル
我等、此ク如何ニ我方ハ實ニ苦ニ境遇 租ルベシ露國ハ勝
手ニ土地ヲ占領シ人民ヲ虐待シタル因リ我ハ之ヲ買収セリ若シ東
清鐵道が地代ヲ拂ヒタルトスバ付偏地トナリ納租ヲ要セザルニ至リ拂ヒ
リシ爲メ我ハ代々地代ヲ拂ヒタルニ因リ納租セザルニ至リ實ニ憐レバシ
ニ租ルニ至ラズヤ
彼等、コレ一應即尤モナル様ニ露國ハ之ヲ看ミテテハ非常
ニ無理ニ振舞ハル様ニ此ニ思フナリ日本軍ハ之ヲ徴シテ清國
ヲ扶上ルナリ我國ハ大ニ之ヲ強クスルニ思フナリ更ニ露國ヲ真似テ
オニ露國タラントせんカハ決シテ露國ハ本書ニテハベシト云フ

貸付、鐵道用地他租を納メヨトミ、主業として交付セラルベ
ク、又、此を納メシテ、問題となる方、茲書いたる解を、先是に
止、次、問題に移ス。

彼等、雇傭、如何に別、如何に故、如何にや。

鉄道、他、例、ア、ト、云、ハ、モ、採炭税、納メ、先、別、雇傭、ヲ、納
義務、ト、思、フ、極、限、炭、他、合同、云、云、山、ト、云、フ、極、限、云、云、モ、ナ
他、例、ニ、據、テ、本、業、同意、アリ、云、云、

彼等、極、限、炭、坑、採、炭、通、リ、考、ヘ、王、業、先、ト、西、清、銀行
ノ、合同、ニ、シ、テ、主、業、先、雇傭、ヲ、納、メ、居、ル、故、ニ、雇傭、ヲ、納、メ、先、ハ、

白、南、ト、思、フ、若、シ、極、限、炭、ニ、雇傭、ヲ、免、セ、他、腐、山、ニ、シ、テ、極、限、用、云、
ニ、シ、テ、困、難、ナリ。

我等、雇傭、如何、ナリヤ

彼等、ハ、十四、又、即、チ、六、分、ナリ

彼等、雇傭、如何、ナリ、申、ス、ト、云、ハ、

彼等、雇傭、山、元、ニ、於、テ、課、ス、レ、而、シ、テ、之、ヲ、右、四、ニ、輸、送、ス、

再、ヒ、雇傭、ヲ、課、セ、サ、ル、ト、云、フ、

我等、雇傭、如何、ナリ

彼等、先、ハ、困、難、ナリ

我等、之、ハ、書、外、ノ、コ、ト、云、フ、故、ニ、既、最、キ、一、マ、シ、テ、例、ヲ、列、シ、陳、

ヘ、タル、如、ク、出、村、税、夏、カ、ヲ、納、ム、炭、坑、ニ、拘、限、セ、ン、ト、ス、ル、モ、ナリ、今、茲、

更、ニ、之、方、ノ、雇傭、ヲ、納、ム、片、最、輕、ニ、ア、ラ、ス、レ、テ、最、重、ニ、拘、限、ス、ナリ

同意、能、ハ、ス

彼号 我方も原指う受るゝに同意する能ふ
 我号 原指う得るゝが鐵務章程にキキアスや免う角有
 指う絶對的同意の能ふ
 彼号 此義に於てハ今一度所熟考ラれに
 我号 我方免う角最惠の兩法をモナリ
 又号 原指う六分上定と居分
 彼号 本條一定セリ
 我号 我方最惠均照スモ原指う取えトセよ最惠の
 兩法をモナリ
 彼号 最惠ト云へルモ多收章程ぬより尤も貴方利ハ所ヲナ
 ヲナリ最惠ヲ取ルル中貴方ハ非常ニ好都合トモ我方立

場より云ハ非常ニ都合要シ此如き最惠均照トモ能ふ
 我号 似然ニ最惠ヲ得し受スリ最惠ヲ受スルハ
 併し一合同契約ニ單ニ出井税五分と定ム例キミアス
 彼号 我方何ハ鐵山主原指う一ハ
 我号 否原指う課セる處モ此毎手處モ收多アリ此表
 一覽セヨハ(五時表ヲ重)免う角此ハニ付テ貴方於テ元
 ノ所考慮ヲ得し強テ之ヲ主張スルニ即チ我カ炭坑ノ
 有リ判セるモ一々皆モ昨相陳ヘる三種ノ鐵條網更ニ個
 ノ鐵條網増至スル鐵山経営成立得ベキモナリ故に絶對ニ
 是ヲ得
 彼号 九段原指うハキ又村をニハ武條原指うモ字句ヲ

彼等 第十一條 関し、總督意見、

一、土地、買収、及び、情因、交渉、告知、を、

二、必要、採掘、終了、を、土地、情因、政府、に、返付、する、

右、二項、に、入、り、し、

我、等、此、二、項、に、別、に、定、め、る、条、に、既、に、遵、行、し、る、に、

三、業、を、不、成、に、採、り、し、る、後、返、納、する、に、勿、論、不、

可、に、記、入、し、る、に、妨、が、な、ら、ず、

彼、等、總、督、の、命、に、依、り、採、入、し、る、

我、等、然、る、に、其、意、味、を、本、條、に、修、め、及、ぶ、に、

彼、等、又、十、二、條、に、關、し、別、に、定、め、る、に、無、期、限、に、他、

例、に、故、に、期、限、を、定、め、る、採、掘、し、る、に、場、合、に、之、を、

續、する、ハ、ト、い、ふ、に、如、何、

我、等、不、成、に、採、り、し、る、に、意、味、を、及、ぶ、に、

彼、等、又、別、に、定、め、る、に、唯、一、の、例、に、依、り、期、限、を、付、

せ、る、に、

我、等、別、に、定、め、る、に、定、め、る、後、採、掘、し、る、に、

更、に、期、限、を、定、め、る、に、

彼、等、又、

我、等、然、る、に、無、期、限、に、同、意、味、を、及、ぶ、に、

又、是、を、

彼、等、不、成、に、採、り、し、る、に、期、限、を、定、め、る、に、

我、等、不、成、に、採、り、し、る、に、

我々 是れ他方坑より今更なる第一増得軍ヲ
 許可シ得る中と別、期限に記載せる事ニ露因側ノ
 江坂書類に依るは無期限と存する所増得るノ權利
 あり事ニ日本カ岩坑ヲ得るノ原因、他ノ左同契約ノ
 飯山ト大ニ趣き異なり第四個名岩坑就雲里収支額
 記し不充ク増得し盡く返トアリ以上ノ理由より無期
 限と見る事知ナリ

彼等 若し理窟よりハルナレバ我々も格々モ古橋鉄道ノ
 期限、今更なる事ナリ故、撫順、岩坑と此期限述ト
 之ハハル得ル事ナリ故、是れ期限記スル事ナリ
 我々 然るに先々此等事ナシ置カシ

彼等 事通四十年五十年位ナリ此例ニサレシ
 我々 二十五年ノ期ノ幾ナリ
 満期此時在岩坑一覽表ナリ
 彼等 然るに意を以テ
 我々 然るに期限二十五年ト定メ期限より不充ク増得
 不能カンリ更ニ之ヲ延長スルコトアルコトナリ
 彼等 可ナリ
 我々 事ナシ條ニ要儀ナリ
 彼等 然る

釐金問題其他情因提呈

彼等 既に本書に大体相互、係属する事なり。此種、
 別之係属致しなす事あり。
 我々 坑区及松根に關する事あり。
 彼等 且つ追償係に關する事あり。
 我々 一應承る事あり。
 彼等 此係属、其基礎を以て第一月其、撫順に於て
 此等、裁別、一、まず決定を以て、此等、故序に
 係属し置る事あり。
 我々 否、この問題、ア、否、本件に係る、當る係る、
 修項、後、この問題、正、同、及、王、最、竟、同、題、外、
 此、断、言、せ、る、し、ア、否、然、る、今、此、の、問、題、に、對、し、

ル、この意外なり。
 彼等 第二、区域に於て、増、益、ノ、為、に、墳、墓、家、屋、ノ、損、傷、
 顛、倒、も、し、場、合、に、如、何、も、う、る、に、は、清、國、人、民、に、於、て、賠、償、
 為、る、風、俗、ナ、リ、此、事、に、規、定、を、し、タ、シ、
 我々 破、夫、ノ、多、う、情、國、民、に、其、中、に、甚、要、混、淆、に、居、る、に、
 會、社、に、於、て、取、締、メ、方、法、を、設、け、し、タ、シ、情、國、人、に、多、う、負、
 傷、し、タ、ル、事、に、故、済、ノ、方、法、を、規、定、を、し、タ、シ、
 我々 第一、致、言、裁、別、ノ、一、に、如、何、ノ、意、味、を、我、方、
 に、別、に、考、へ、居、る、事、あり。
 又、我々、第二、我々、本、問、題、ノ、範、圍、に、在、る、事、一、に、致、言、裁、別、
 裁、別、ノ、全、然、別、物、ナ、リ、本、問、題、ノ、範、圍、外、ノ、事、ナ、リ、故、に、

日清州鐵道株式會社

之、一度、居、坑、園、を、事、が、チ、根、據、決、意、を、な、し、後、更、に
 議、を、し、如、所、新、の、昨、年、ノ、和、約、を、ア、リ、ザ、リ
 彼、等、此、ノ、ミ、テ、條、を、能、く、相、償、し、細、則、を、取、入、る、に、在、
 り、免、る、南、滿、定、し、置、き、而、し、貴、方、に、境、を、基、家、屋、ノ、事、
 及、七、破、夫、取、締、故、留、る、當、々、本、問、題、ノ、範圍、を、も、経、營、
 裁、判、ノ、別、を、ア、リ、ト、云、は、し、も、此、ノ、爲、美、事、件、ノ、以、上、ノ、二、項、之、件、
 々、自、ら、生、ず、ん、別、産、物、々、々、情、國、ノ、主、權、ノ、尊、重、し、と、
 云、う、根、約、ノ、明、文、ヲ、當、然、ノ、理、定、し、得、ん、ト、サ、リ、必、々、本、問、
 題、ノ、條、々、決、定、し、置、か、し
 我、等、我、方、清、國、ノ、主、權、ノ、尊、重、を、故、に、額、産、提、納、
 し、ア、リ、ザ、リ、ヤ

彼、等、夫、レ、の、語、解、ナ、し、一、切、ノ、主、權、ノ、尊、重、し、ト、ア、リ、ハ、之、ヲ、誤、ス、ル、を、
 可、サ、リ、ザ、リ、ヤ
 又、曰、う、裁、判、ノ、コ、ト、ハ、條、約、ヲ、根、據、ス、ル、ヲ、カ、ク、し、ナ、し、は、故、に、美、事、
 々、々、之、ノ、條、約、ノ、條、々、ノ、條、約、ノ、條、々、ノ、條、約、ノ、條、々、ノ、條、約、ノ、條、々、ノ、條、約、ノ、條、々、
 々、々、其、等、情、事、々、々、日、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、々、
 序、を、付、す、と、ハ、別、々、日、本、に、於、て、該、美、事、々、々、置、カ、ル、ノ、必、要、ナ、シ、ト
 思、ふ、故、に、我、方、に、於、て、之、ヲ、置、く、コ、ト、ナ、シ、
 我、等、是、レ、ハ、先、キ、に、申、せ、し、如、く、先、ツ、岩、坑、ノ、園、々、々、々、々、定、ム、ハ、
 如、何、式、ノ、コ、ト、ハ、別、々、爲、す、と、云、は、し、然、レ、ウ、サ、レ、ハ、決、判、永、引、々、々、レ、ハ、岩、坑、ノ、
 園、々、々、々、々、免、る、南、滿、會、社、ノ、取、締、々、々、レ、ハ、成、立、ス、ル、を、経、營、
 々、々、々、々、々、我、等、政府、ノ、意、見、モ、ア、リ、決、定、ス、ル、易、サ、リ、ヤ

日清戦役資料

彼曰、別々相決らんを宜しからしむ此ノ度ノ事、所帯
相違ふんをト決り相和アリタシ

我曰、然らば我政言臺々如所よりしとスル意見ナリヤ

彼曰、免る角我方ノ主権トシテ教言臺、我方ニテ置テ事ト
シタシ

我曰、此問題、大ナリ直ニ回答シ難シ

彼曰、道一、片返事ニテ従ふアラス、唯以前ノ年サカリシ
種々問題アルを、後、廻リシルノニ法合ニテ置カシ度シ

我曰、此儀、即刻ニ為シ難シ、應政府ノ議ヲ經テ
後返事トシ故、頗る永引テ、恐レアリ、決り相和スルベ
シ

彼曰、決シテ今明日トシ、之ハ以テ降コレヲ議決セカシハ、表

鴨緑江架橋問題ノ時、於ケルト同一轍ニ後廻リシト爲ヌトナリ

貴方ハ容易ニ之ニ應ルカシト恐レ、彼ノ問題ニ其當時將
明ケナリシ爲メ、今日ニ至ルニ片付カカンナリ、貴政府トノ往復

ニ速間ナシハ是レ凡ソ此間ニ於テ何如、決打ナセアリタシ

我曰、我政府、夕方ノ前、先ツ貴方、おまツ見タシ

墳墓、家屋及ヒ礦夫ノ割らん、之、御協議ノ為カシ
唯カ教言臺ノ件、付テハ貴方見タル上、之、カハ政府
側々ニ難シ

彼曰、無煩ニ終ル教言臺ノ事、我方、於テ速ルト
テ、意大ナリ

我曰 日本ノ警察ノ轍ニヨリテハ
 彼曰 然リ
 我曰 其区域
 彼曰 撫順王全休ナリ
 我曰 コレナリナシガ貴方ノ意味ニ了解ナリ
 彼曰 我が主権ノ根據ニ於テハ所謂一切ノ主権ヲ尊重
 シタルニテモ是ナリ
 我曰 本日ハ此ノ様ニ明々王承克ノ一ノハ議セシ
 彼曰 王承克本邦ヲリテ如何
 我曰 王承克本邦ヲリテ既ニ計算書ヲ提出シテハ
 是ナリナリ

彼曰 王承克ノ問題ハ此ノ大伴貴方ニ申シタルハ御
 承知ナリ本件ハ我方ニモ元ノ取調ナシ居ラレタリ
 此處ニ呼ビホシテ取調ナシ便宜多カラシ
 我曰 我方ハ何レモ宜シ保シ鬼ノ角コノ事ヲ明白
 議セシ
 彼曰 然リ明日九時半ニ開議セシ
 又曰 露國弁償ノ一ノ所方ハ決返事承知ナリ
 我曰 政府上付申ナリ
 又曰 露國、外墳墓、家屋、破夫ノ関スル件ハ明
 日迄ニ修メテ記載ニ置カレタリ
 彼曰 墳墓、家屋、破夫、場合破夫、破夫ノ救済

ノコトハ其程度不明ナリハ法考ハテ承ラタレ

我曰ク 我方ニ於テ事ヲ設ケルカ

彼曰ク 然リ

我曰ク 明ニ示サレ

彼曰ク 極メテ簡單ニシ置レ

撫烟西炭坑細則ニ關スル第十一回會議録

(七月二十一日全委員出席)

要復寫

我曰ク 本日ハ王義亮ニ關スル事ニ付議セン就テハ一應貴方ノ説明ヲ聞カ
ン併シ此議ヲ為スニ先ケ一應決方ノ意見ヲ陳ベン王義亮ニ對シテハ當
方ヨリ賠償ヲ為スニアラズ當方ニ彼レニ對シ權利義務アルヲ認メヌ夜々
申ス如ク當炭坑ハ戰役ノ結果ニ依リ獲ルモノナリ唯タ王ニ對シテ氣毒
ヲ感スル故我々ハ派金ヲ出スノミ貴方ニ於テハ當方ノ意ノアル處ヲ含
ミテ以テ議セラレノヲ望ム

彼曰ク 貴方ノ言フ所一應了解ス我方ニモボーツマス并ニ北京協約ヲ承認
セサルニアラズ併シ之ヲ賠償トシテ要求スルニ付三個ノ理由ヲ有ス

一撫順ハ炭坑ハ露國ト王義亮トノ合資ヲ以テ採掘シ私人トシテノ經營
四十二年十一月一日記録 龍堂

ナリキ貴國カ露國ヲ獲ラレタルモノハ無論賠償ノ義務ナカラシモ清國人
タル王ニ對シテハ賠償ノ義務アルベシ

二貴國公使カ北京ニ於ケル協約ニハ出資額ニ應シ優ニ從ヒ酌給ストアリ
即チ出資額以上優ニ金ヲ給付ストノ聲明ナリ

三日露戰役ノ為メ貴國王義亮カ蒙レル損失ハ素ヨリ賠償セラルノ義務
アリ王ハ之ヲ要求スルノ權利アリ

以上三個ノ理由ヲ以テ賠償ヲ要求スルモノナリ

我曰ク 昨年北京ニテ我公使ノ聲明セル書ニ依レハ優ニ從テ銀若干ヲ給付
ストアリ之ヲ權利ト曰ハルカ權利ナレハ賠償ト云ハサルヲ得ズ貴方ハ全然
誤解ナリ

彼曰ク 優ニ從テ給付ストハ如何ナル意味カ

我曰ク 優ニトハ寛大ト云フ意ナリ 即チ王義亮ノ情状ヲ酌量シテ可成寛大ニ給典セントノ意ナリ

彼曰ク 情状ヲ酌量シテ寛大ノ給付ヲナサントハ其意味甚ク解シ難シ何ナル程度ヲ指スカ

我曰ク 王義亮ノ情状ヲ知悉スルニアラサレバ程度ヲ知ルニ由ナレバハ一百万ニテモ寛大ノ程度ナルヲアリ百万円ニテモ寛大ノ程度ナラサルヲアリ免ニ角王ノ事情ヲ精シノ聞カサル間ハ其ノ程度ハ申シ難シ

彼曰ク 米タ其寛大ナル語ノ意ヲ解セス併レ事情ヲ聞キ程度ヲ定メシトナレバ既ニ王ノ願書ニ依リ御意知ナラン

又曰ク 我方ニ撫順炭坑ヲ日本ニ於テ占領セラレタル以來三銭ノ租税ヲ得ル能ハス非常ノ損害ヲ蒙レリ又戦時加藤ナルモノカ千七百金屯ノ取炭ヲ

奪ヒテ運送セリ此ノ代價及之ニ対スル採掘費其後王カ炭坑恢復ノ為メニ使用シタル運動費并ニ股本等ハ素ヨリ賠償ノ責アルベシ此レ等ニ付貴方ノ意見ハ如何

我曰ク 然ラハ王義亮ノ要求總額ハ何程ナルカ

彼曰ク 全部ニテ七十万兩ナリ

我曰ク 此額ハ交渉使ニ於テ適當ト認メラルハカ

彼曰ク 王カ願出テタル額ナリ

我曰ク 貴方ハ一モ御取調ベナキ儘ノモノヲ議ニ上セラルカ

彼曰ク 否當方并ニ祁道臺ノ調ヘタルモノ及ヒ株券ニ對スルモノヲモ含、

ニ適當ナルモノト認ム

我曰ク 確實ナリヤ

彼曰ク 株金ト加藤ノ運送トハ茲ニ証據ヲ擧ケルモ明白ノ事實ニシテ
ニ及バズ其他王ノ所持スル帳簿ニ依リ明ナリ

我曰ク 昨日差出サレタル露國ノ賠償金ハ二十万両トアリ王ノ分ト別ナルカ

彼曰ク 別ナリ此ノ二十万両ニ至リ請求ノモノヲ含スルハ二十万両ヲ超エ併シ

ナガラ資本ニ付シテハ二十万両ヲ賠償サルナレハ不當ニ當方ニ於テ分配セン

我曰ク 王兼克ハ二十万両ヲ所持スルカ

彼曰ク 否二十万両全部ヲ所持セサルベシ自分ハ露國ノ所有ハ七万両位

ナラント思フ

我曰ク 王ハ十三万両ナルカ

彼曰ク 王ハ十三万両ナリシモ其後多ク露ニ賣リタル取跡アリ

我曰ク 王ノ方ヲ取調ベクランニハハル明スヘシ

彼曰ク 然リ然レ王ハ不快ノ由ニテ王ノ代表者カ今日此處ニ來ル筈ニナリ
居レリ

我曰ク 株金ニモ既ニ拂ヒタルモノト未拂ノモノトアリラン

彼曰ク 否ナ株金二十万両ニ付シテ十六万両ハ拂ヒ済ミシテ四万両ハハ身股

即チ權利株ナリ之ハ出資セサルモ當然要求スル權利アリト認め

我曰ク 仮ニ我方ヨリ二十万両ヲ出セハ貴方ハ如何ニ分配セラルカ

彼曰ク 二十万両ヲ得ル株券數ニ應ジテ分ツ

我曰ク 露國ニモ分ツカ

彼曰ク 然リ露國ニモ分ツコレハ總督ヨリ外務部ニ送り露公使ヲ經テ配タシ

我曰ク 昨年九月北京條約ノ際既ニ王兼克ノ出金額ハ明ニ知レ居ル筈

ニテ其際此點定書ヲ北京ニ提出セラレタルヤ

彼曰ク 其當時北京ニハ送ラザリシ

我曰ク 否其當時北京ノ談判委員ノ手ニ取持セリト云フ

彼曰ク 然ラハ其當時ノ要求額ハ此ノモノヨリ多キカ將タ少キカ

我曰ク 熟知セサルモ此ク多額ノモノニテハアラザリシ

彼曰ク 其金高ハ政府ノ明文アリヤ

我曰ク アラス併シ談シニ出テタルナリ

彼曰ク 其時ハ唯タ株券ノミノナラン王秉堯ノ申出全部ニハアラザル

我曰ク 王ノ運動費ト云ヘルハ如何ナルモノヲ云フカ

彼曰ク 炭坑ヲ占領セラレタル以來北京其他ノ復讐或ハ訴願等ノ為メニ

費シタルモノナリ

我曰ク 昨年北京ニ於テ我公使ノ聲明レタル所ニ依リハ株金ノ才資金

ヲ按シテ優ニ給付ストアレモ諸雜費迄モ給付スルヲハ西國委員ノ念頭

ニハ決シテアラザリシナリサレバ此ノ諸雜費ニ付テノ協議ハ敢テ為スノ必要

ヲ認メズ

彼曰ク 資金ニ應シ給ストハ明文アリヤ

我曰ク 有り出資額ニ應シ云々トアリ御覽アレハ明カナラン

彼曰ク 出資額トハ資本ノミヲ云フニアラス出資トハ株金ニモレ諸入費ニモレ其

性質ノ如何ヲ問ハス支出シタル金ノ總テヲ云フ

我曰ク 身股ハ別トシテ銀股ハ全部拂込ミタルモノナル

彼曰ク 全部拂込ミタルモノナリ

我曰ク 始メ株式募集ノ時道勝銀行ノ持株ハ何程ナリ

彼曰ク 六万両ナリ

我曰、之レハ道勝銀行者皆拂込ミタルヤ

彼曰、然リ

我曰、我ヲ取調ヘタル所ト相違セリ株金六万両ハ相違ナケレモ全部ノ拂込ミハ終ヘサル苦ナリ

彼曰、否ナ六万両ハ當時露清銀行へ預ケアリタリ

我曰、然ラハ其全部六万両ヲ引出シタル証アリヤ

彼曰、王ノ帳簿ニテ知ルヲ得ン

我曰、我ヲ調ベタル所ニ據レハ其拂込ハ三万七千五百兩ナリ當時道勝銀行へ預金トセリ後之ヲ引出シタルヤハ知ラサレモ兎ニ角拂込ミタル株金ハ三万七千五百兩ガ確實ナリト思フ

彼曰、サレバ餘ノ金ハ如何ナリシヤ

我曰、戦争トナリタル為メ終ニ其儘トナリ下リタルナラン

彼曰、之レハ不確實ナラン

我曰、是レハ別トシテ身股ヲ除キ清國民側ノ株金ハ十万両全部拂込ヲ了リタルモノナルヤ

彼曰、其當時ノ全体ノ拂込ヲナサバ石炭採掘ヲ始ムルコト能ハサルニアラス

故ニ其當時全部ノ拂込ヲ了セシナリ

企業ハ如此モノニアラス最初多少ノ出資ヲ為セバ漸次必用ニ役テ引出スモノナリ十六万両ヲ資本金トスルモ始メヨリ悉ク出スヘキモノニアラサナリ

彼曰、最近ノ慣例ハ貴方ノ言ノ如シ例令ハ五円ノ株券ハ最初一回次ニ又一回ト出ワ如ク拂込ミ五円ニ満チタルトキ株券ヲ典フルモ旧時ハ全ク異リ株金ノ全部一時ニ拂込ミテ始メテ株券ヲ受クルモノナリ故ニ次シテ内拂

ヲ為ス等ノ一ナシ

我曰ク 清國人民側ニ於ケル十方面ハ全部拂込ミタルニ相違ナカルベキモ道勝銀行ノ公ハ疑フベキモノアリ我調査シタル所ニヨレハ確カニ三万七千五百両ダケヲ三回ニ拂込ミタル者ナリ

彼曰ク 實際ノ出資ノコトヲ机上ノ論ニテハ知ルベカラズ故ニ之ヲ株券數ニ依リテ調査レバ判明セシ王義堯ノ一ニ付テハ即チ王カ所持スル株券ヲ見ン

我曰ク 現在ノ露國所持株ハ我何ナリヤ御取調アルカ

彼曰ク 此事ハ總督ヨリ露都駐劄劉薩公使ノ聞合セ中ナリ

我曰ク 株數少ナケハ清國人民側ヲ取調ヘテモ直チニ分ル者ナリ

彼曰ク 其當時露國ノ賣リタル者皆揃ヒ居レハ分ル者ナレトモ或ハ死セシ

或ハ捕囚シタルモノアリ確實ニ其數ヲ計算スル一至難ナラン

我曰ク 王義堯ハ公司ノ代表者ナレハ名義書換等ノ為メ王ノ手許ニ在ル東洋及書類ニ依リ取調アル事ヲ得ン

彼曰ク 株ヲ賣リシモノ一々出テ来タルハシ仮令ハ當奉天ノ馬錦ノ株ノ如キ

モ轉々讓共賣買ラサスモノアリ然レトモ一々之ヲ届テ出テズ最初ノ株主ハ現

在何人ニ換リ居ルカヲ知ラザルト同シキモノナラカ

我曰ク 株ハ記名カ無記名カ

彼曰ク 無記名ナリ而シテ最初ノ間ヨリ讓渡ノ届出ハ為シタルトモ遂ニ其

間トナリタリ

我曰ク 定款ニ他國人ニ賣買讓渡ラザルモノアルニアラズヤ當時他國人ニ賣リシモ貴國ノ法律ニテ之ヲ答メザリシカ

彼曰ク 定款内ニ他國人ニ賣買讓渡ラザルモノモ始メヨリ株ヲ所持スルモノニ

ハ賣出スルヲ得ルナリ居ルナリ

我曰ク 我聞ク汝ニ依リハ道勝銀行最初ハ六万兩ナリシモ漸次株ヲ買占

メ其大部分道勝銀行ノ方ノ手ニアルト汝知ス其方ノ取調ニテ如何

彼曰ク 尤ナリ然ラン

我曰ク 貴公使ヨリ二十万兩ハ賠償申出テアリ大部分カ道勝銀行ノ手ニ

アルカ為メナラン

又曰ク 會社カ若シ我分ノ金ヲ出ストモ其大部分ハ王ニ歸セズシテ露

ノ得ル所トナルニアラズヤ

彼曰ク 謝尤モナリ

我曰ク 夫スレハ王兼克ハ功ニテ功ニテアリスヤ此クナレバ王ニ對シテ恩タ氣

ノ毒ナル譯ナリ

彼曰ク 王兼克ハ運動費等ニ多額ノ出費アリコレ等ヲ得ント思フナリ

我曰ク 王ノ要求スルガ會社カ支出スルトセハ王兼克ヘナランモ然ニサル場合

ハ王兼克ノ毒至極ナリ功ナキニ終ラノミ此事ニ付テハ交渉使ニ於テ何ト

カ御考察ナキヤ

彼曰ク 株金ノ露ニ歸スルヲ止ムヲ得ズ併ニ加藤某ノ運炭セシ代償具

外王ノ運動費等ノ出費ハ王ニ歸メルニアラズヤ

我曰ク 加藤ニ關スル石炭ハ別トシテ四十万兩ヲ王カ得ル株金ニ

十萬兩ハ此内ニ含マレ居ルモノナレバ株金ハ自ラ償却サルコトナルニアラズヤ

王ハ資本欽走道ハ資本ヲ使用シ其不足ヲ告グルニ至リテ之ヲ補充セリ

故ニ則ニモ由ス如ク四十七万兩餘兩ヲ得ルト仮定セハ自ラ其内ニ資本ノ

金ヲ得タル譯ナリ

彼曰ク 御説尤ノ様ナレト始メ千万兩ノ株金ニ鑛山ニ使ヒ盡セリ後露國
人及貴國人来リテ石炭ヲ採掘スルニ至リ王ハ徒ラニ名義ヲ存スルノミテ
其株主間ニ於ケル往復炭坑恢復運動ノ為メ北京其他ニ奔走セル費
金ハ決シテ二十万兩内ノモノニアラズ故ニ二十万兩ハ四十七万餘兩ノ外ニ要
スル金ナリ

我曰ク 否貴説ノ如キヲアラス王兼堯ヨリ出セシ計畀書ニ依リテ明ナリ技
師ヲ雇ヒ開掘ヲ為シ坑木購入等ニ至ル迄總テ資本金十六万兩内ヨ
リ支出シ此資本金盡キテ初メテ補充シタルノミ始メヨリ補充金ヲ出シタル
ニアラズ故ニ此資本金ハ四十七万兩内ニ包含スルナリ貴説ノ如ク此外ニ二
十万兩ヲ出セバ恰モ資本金ハ一里ニ見積ルフトナルヘシ

備考 此時王ノ勘定書ヲ示シテ韓交渉使ノ誤解ヲ解ク

彼曰ク 此ノミ付テハ爭フノ必要ナシ王兼堯ノ代表者来ラハ自ラ解決セン

我曰ク 資本ハ何ニ使フト思ハルカ

彼曰ク 資本ハ鑛業ニ使ヒ又ハ運動ニ使ヒタリ故ニ四十七万兩内ニ幾分株金
ヲ含ミ居ルヤモ知レス

我曰ク 王兼堯ノ提出シタル書面ニヨリ明ナラズヤ資本金全部ヲ使ヒ盡クニテ
始メテ不足アリ之ヲ補充スルトナルナリ

彼曰ク 然ラハ四十七万兩ノ費用中貴方ノ調ベラレタル十三万七千五百兩ヲ差
引キ三十三万兩ノ費用ハ王カ出セシフトナルカ

我曰ク 然リ貴方ノ考ノ如クセハ二十万兩ノ資本金ヲ二重ニ計畀スルト
ナルナリ

彼曰ク 委細ハ王ノ代表者ニ聞カン

我曰ク 北京ニテ王ヲ使ヒシ金ハ何ニ用ヒタルカ

彼曰ク 王義堯ハ許願ノ為メ事情陳述ノ為メ支出セシ運動費ナラン

我曰ク 其金マデ出セト云ハルカ

彼曰ク 兎ニ角王ハ炭坑ノ為メニ使ヒシモノナリ

我曰ク 會社ニ於テ貴方ノ申出テ通り出金スレハ王ニ對シテモ亦露ニ對シテモハ
方好都合ナラン併シ此ノ出金ノ至極大ケ敷カラシ否ナ斷シテ出ヌ苦ナシ北
京ノ約束モ單ニ出資ヲ按シテ給付スルヲ陳ベタル迄ナリ去レハ會社ニ於テ
今後多少ノ給付金アリトス 其大部分ハ道勝銀行ニ歸シ王ニ歸スル
所ナク王ハ悲境ニ陥ラレ故ニ之カ處分法ニ付先キニ交渉使ニ於テ適當
ノ考ナキヤト申セシナリ

又曰ク 當時王ハ東清鐵道ニ澤山ノ石炭ヲ給シ代金ヲ受取ラサリシモノア

ラン果シテ然ラハ王ハ道勝銀行ニ對シ代金請求ノ權モアルベク又會社ヨリ
給付金アリタリトテ之ヲ露ニ分配スルノ必要ナキニアラスヤト思ハル此辺ハ能
ク能ク御熟考アリタキモノナリ而シテ此ノハ可成公然ニ發表セサル方貴方
ニ於テモ好都合ナランカ

彼曰ク 王ノ為メニ計ラル、段御尤モニシテ王モ足メテ感謝スベシ然レトモ王ハ
此件一應決定セハ道勝銀行ニ對シテハ更ニ交渉ヲ開始スルトノナリ

我曰ク 露國公使ヨリ申出タル株券一件ハ當方ニ於テハ敢テ關係セス貴方
ニ於テ處分サルノナラン

彼曰ク 如何處分スルカ

我曰ク 之ハ露國公使ヨリ貴方ニ申出テシモノナレバ我方ハ関セサルナリ

又曰ク 王義堯ニ對シテハ權利義務アルニアラス唯タ現状ヲ憐ミ多少ノ給

付金ヲナサント欲スルノミ王ニ於テハ我カ給付金ヲ得ルモノ之ヲ株主ニ配
當スルノ要ナカラシヤレバコソ先程ヨリ度々交渉使ニ對シテ王義克ノ處
分ニ付キ好個ノ方法ヲ講セラレンコトヲ促スモノナリ

彼曰ク 王義克ノ為メニ謀ラル、所ハ了義セリ併シ王カ使ヒシ資本金ノ内ニ對
シ特ニ給付セラル、カ或ハ資本金ヲ引キ去リタル外尚又額ハ幾何ナルカ

我曰ク 會社ハ王ニ賠償スルニアラス又株主ニ賠償スルニアラス故ニ王ハ會社ヨ
リ給付金ヲ受クルモ株主ニ配付スルノ要ナカラシ 既ニ王ハ當時澤山ノ石炭ヲ
露ニ給シ居レバナリ故ニ王ニ對スルコトハ相互ノ間ニ於テ秘密ニ取極メント思フ
要スルニ王ノ事情ヲ氣ノ毒ニ思ヒ對斗ヲ付シテ王ニ與フル減金ナリ

彼曰ク 其額ハ如何

我曰ク 一應本社ニ相談シテ定メン、額ヲ定メタル上ハ包金トシテ交渉使ニ渡

スコトナラン

彼曰ク 然ラハ此計算書ニ仍リテ賠償セラレサルカ

我曰ク 然リ賠償ニアラハ計算書ニ據リテ彼是スルノ必要ナシ故ニ其際王
ノ計算書ヲ返付セン

彼曰ク 其ノ御考ヘナレハ王ハ德トシテ義諾センモ政府ヨリノ公文ニ出資額
ニ應シ優ニ給付ストアレバ出資ノ額乃チ諸費總額ヲ按シ優ニ出金セラ
ル、コト公明ナラン

我曰ク 我國ノ出資ト云ヘル前ニ述ベシ如ク資本金ノコトニテ貴方ノ解釋ト
全ク異ナル

彼曰ク 先ニ前資本金ト其外ノ當用トヲ會ミタル賠償ヲ要求スルナリ

我曰ク 會社ハ決シテ王義克ノ云ルカ如ク賠償セサルベシ故ニ我方モ會社

ヨリ出金額ヲ聞キ而シテ可成円満ニ局ヲ結ブ様致シ度シ先ニ角會社
ヨリ包金ヲ交渉司ニ渡セハ其ノ分配ハ貴方ニテ適宜ニ從テ御分配ヲ願ヒ
タシ

彼曰ク 王義亮獨リニ金ヲ遣レバ王ハ好都合ナシモ王ハ決シテ單獨ニ得テ
レナルニ何トナレバ王ハ他ノ株主ヨリ澤山ノ借金ヲナシテ運動ヲ繼續シ
来レリ之ヲ辨償セザレバカスヘ故ニ王ノ所得トナラズト思ハル王ノ使用シタ
ル金ハ素ヨリ優ニ從ヒ給甘ストアレバ何卒王ノ使用シタル總金額ヲ賠
償セラレタシ

我曰ク 先キニ云ヘル如ク會社ハ王ニ賠償スルニアラス 先年旅順ニ於テ
戦後私有財産處分ノ為メ臨時裁判所ヲ開キタルヲアリ當時翁
舟ノ河東區ヲ買収シタル露國樞東森林會社ハ或米人ノ名ヲ以テ

談裁判所ノ鑛區ノ運付及賠償ヲ要求シタルヲアリ其時我國ノ裁
判所ハ談鑛區ハ私人ノ財産ナリトスルモ國家ハ私人以上ノ優勝ノ權
力ヲ以テ國際法ノ私有財産不可侵權ノ例外處分ヲナシ日露日清兩
國ノ條約ヨリテ談鑛坑ヲ日本ニ譲リタルモノナレハ日本ハ之ニ對シテ還
付又賠償ヲ為スノ理由ナント判決セルヲアリ當時若シ王義亮カ同
様ノ訴求ヲ為シタリトセハ同様ノ判決ニ遇ヒタルハ勿論ニシテ貴方ハ
連リニ王義亮ノ炭坑ハ私人ノ經營ナリト主張セラルモノ若シ王ニ對
シテ賠償ノ義務アリトセハ之ハ炭坑ヲ譲リタル清國又ハ露國ノ義務ニ
シテ我國ノ國知スル所ニアズ故ニ今王ニ對シテ我カノ給典ヲ為サン
ト云フハ決シテ王ノ損害ヲ賠償スルノ譯ニアラス

彼曰ク 先ニ角賠償カ給典カ文字上ノハ問ハズ唯タ出資ノ數ニ應シテ

優ニ從ヒ御給典アリナリ

我曰ク 貴意ハフス能ク會社ノ意見ヲ問合スヘシ唯タ貴方主張ノ賠償ト云フハ撤回セラレテ然ルヘシ

彼曰ク 王ニ取リテハ賠償ナク給付ナリ問フ處ニアラズ多額ノ出金ヨリ望マレケレ

我曰ク 清國ニ對シ賠償シタリトセハ露モ亦賠償トシテ貴方ニ要求スヘシ我會社カ王親克ヲ慰ミ渡金ヲ與ヘタリトスレハ露ハ別ニ對抗スル理由ナカラン故ニ此クスレハ相互ノ都合宜シカラシ

彼曰ク 露ノ公文ニ對シテハ貴方ニ於テ且數回答ヲ願フ

我曰ク 政府ハ貴方申出ノ儘ヲ傳ヘタリ故ニ政府ヨリノ回答アリ次第ニ御送付スヘシ

又曰ク 王ニ對スル渡金ハ他ニ減ラサル方宜シカラシ若シ王ハ渡金ヲ受ケタ

リト聞カハ株主ハ王ニ分配ヲ迫ラン

又曰ク 王カ露ヨリ受取ルベキ金額即チ石炭代其他ノ取前ハ何程ナルカ

彼曰ク 王ノ申出ニ依レハ百十萬兩(十萬兩)ナリ

我曰ク 王ノコトニ付同フハ先ツコレニテ措カン

彼曰ク 王ニ關スル詳細ノ事ハ代表者ニ就キテ聞キ置カン免 用此事情ヲ本社ニ御打合せアリタシ

我曰ク 本協議ニ關シテハ貴方ノ主張モ能ク了解シ我方ノ主張モ一通リ陳

ベタリ此上ハ一應本社ハ打合せ此次ノ會見ノ際ハ速ニ結了セシメテ希望ス

彼曰ク 當方ニ於テモ貴方ノ主張ヲ知ルヲ得タリ總督ニ此ノ全体ノ報告ヲ為

サシ可成ハ貴方ニ讓リ得所ハ讓リテ相互好結果ヲ得シメテ希望ス

此ノ次ノ會見ハ來月初旬ヲ約シテ開會ス